
女神ヴェルマーレ

吉田 匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神ヴェルマーレ

【Nコード】

N8153Q

【作者名】

吉田 匠

【あらすじ】

女神ヴェルマーレ。人々の為にその身を投げ打った彼女を皆慈愛の女神と崇拜していた。しかし実際は……………
基本的にのんびり展開です。
タイトル変更しました。

0話 女神の詩

それはある女神のお話。

遙か昔。

神々が住む世界にある存在が現れた。

それは次々と神々を殺していった。

恐怖しそれをこう呼んだ。

『神滅』

神滅の力は強大で神々は必死に抵抗した。

長い年月を経て遂に神滅を退けた。

しかし神滅は膨大な数の欠片となりながら逃げていった。

その先は神以外の種族が生きる世界。

神々は安堵した。

その世界に行けば二度と自分達の世界には来れないから。

だが一人の女神だけは違った。

「彼等はどうなるのです、私は放って置けません」
そう言い、他の神々が止めるのも構わずただ一人その世界へと身を
投げた。

吟遊詩人は語り継ぐ。

我等の為にその身を投げ打った一人の女神。

『慈愛の女神ヴェルマーレの詩』

その世界では幼子まで知っている詩。

1話 リネアの出会

「はあはあはあ…」

息を切らしながら森を疾走する少女。

白いローブに銀製の首飾り、手には金色の宝石が嵌っている杖を持つ。

銀髪と言うより見る角度によっては白髪に見える髪を肩口で揃えている。

年の頃15〜6程。

少々キツイ印象を受けるが可愛らしい顔立ち。

「頑張つて!!」

後ろを向き声を掛ける。

其処には必死に走る母娘がいる。

かなり辛いのだろう、返答出来ずに頷くのが精一杯の様子。

そもそもこんな事になったのは彼女、リネア・バルハミンが乗合馬車でザルマドに向かっていた道中に盗賊が襲ってきたのだ。勿論護衛は居たのだがあまりに盗賊達の数が多く馬車を守りきれず客達はバラバラに逃げ出した。

この母娘は途中で仲良くなり一緒に逃げたのだ。

しかし後方から盗賊達が追ってくる。

ザルマドまではまだ馬車でも二日掛かる。逃げたところでどれほど保つのか。

リネアの頭の中が絶望で染まる。

「きゃあ!!」

母娘が叫び声を上げる。

転んでしまい母親が足首を抑える、挫いてしまったようだ。

リネアは肩を貸し何とか逃げようとするが彼女の力と体力では無理な事だ。

「居たぞ!!」

盗賊達が叫ぶとあつという間に囲まれる。

リネアは母娘をなんとか大木まで連れてくる。背中を大木に預けるが少しの抵抗にしかないだろう。

「くっ!？」

リネアは母娘を庇うように盗賊達の前に立ちふさがる。

「一人でどうするつもりだい？」

盗賊達は下品に笑い合う。

リネアは下唇を噛む。

忌々しいが奴らの言う通り。

見渡すと盗賊達はざっと20人は居る。

この人数相手に立ち回れる程の力量をリネアは持っていない。

このままだと良くて奴隷商に売られ、悪ければこの場で犯され殺される。

どの道禄でもない末路。

だからと言ってこのまま何もしない分けにはいかない。

自分はどうなっても最悪この娘だけでも助けなくてはと覚悟を決める。

「捕まえる……ぶげ!？」指揮をしていた盗賊が突然何かに潰されように地面に這いつくばる。

男の上に乗っているのは女性。

見た目20歳そこそこ。服装は革のズボンに白い服の上に革製の胸当てと、普通の冒険者風。しかし長く流れるような金髪に服の上からでも分かるスタイルの良さ、蒼く宝石のような瞳。美人の一言で済まされる容姿ではない。

その女性が今、男の上に乗っかっているのだがどうも様子がおかしい。

瓶を片手に微かに揺れ顔が赤い。

「ありや落っこっちゃったかあ」

そう言いケタケタと笑う。

「お!?!可愛い子はっけ〜ん」

リネアを見るとにじり寄り抱きつく。

「え!?!あ、あの……う!?!酒臭っ!」

女性は酔っていた。

リネアは思わず顔を背けるが女性は構わず顔を近づける。

「んふふ〜お姉さんに任せなさいい〜」

リネアを押し倒す。

「ちょっと止め……そんな所触らないで下さい!」
色々と弄り始める女性に必死で抵抗するリネア。

「ぐ……ふざけやがって」

女性に潰された男がようやく立ち上がる。

「何突つ立ってやがるてめえら！！此奴等を捕まえろ！！」

その声に妙な展開に固まっていた盗賊達は我に返りリネア達を捕まえようとする。

「こんな事してる場合じゃ……」

何とか女性から逃れようともしがくりネアだが何故かビクともしない。

そんな事をしている間に目前まで盗賊達が迫る。

（もう駄目！！）

諦めたリネアだったが次の瞬間目を疑う。

「五月蠅い」

女性がパチンと指を鳴らすと盗賊達の動きが止まる。

「え？」

何が起きたか解らずキョトンとするリネア。

盗賊達は必死になって動こうとしているが上半身だけしか動かず一歩も歩けない。

（何アレ！？）

リネアは盗賊達の足に何かが絡まっているのに気づく。

それは蔓。

地面から生えた蔓は盗賊達の下半身を絡め捕り行動を奪っていたのだ。

その異様な光景にリネアはただ啞然とした。

彼女の知る限りこんな事は起こり得なかった。

「さ、もう邪魔は入らないわよお」

そんなリネアを余所に女性は更に迫る。

「助かったようで助かってないー!!」

「大丈夫大丈夫怖いのは最初だけ……」

バゴツ!!

「ふげっ!!」

打撃音の後に女性は頭を抑えうずくまる。

「何遊んでんだこの酔っ払い!!」

青年が今女性の頭を叩いたであろう鞘に入った剣を肩に担ぎ見下ろしている。

青色の髪に目つきの悪い目、銀に輝く防具は肩、胸、脛と最低限な箇所だけある。

「ちよつとアー君痛いわよ……」

涙目で青年を見上げる女性。

その姿は愛らしさがあり男なら見とれる程なのだが、

「やかましい、酔っ払った拳げ句人様に迷惑かけてんじゃねえ」

青年は女性を退かしリネアに手を差し伸べる。

「連れが迷惑かけて申し訳ない」

「い、いえそんな」

その手を取り起き上がる。

確かに迷惑と言えはそうだがあのまま盗賊達に捕まるよりは遙かにマシ。

「助けて貰い有り難う御座います」

女性が何をしたか分からないが助けられたのは確かなので女性に向かい礼を言う。

女性はニヘラと笑い、

「んじゃお礼はあなたの体で……ぶぎゃ!!」

リネアに飛びかかるうとした女性を再び青年は鞘に入った剣で叩き伏せる。

「まったく。酒癖の悪さは治らん」

溜め息混じりに呟く青年。

「あの私はリネアと申します。あなた方は？」

戸惑い気味に青年に声をかけるリネア。

「ああスマン、俺はアールス。んでコイツは」

親指で女性を差し、

「ヴェルマーレだ」

これが彼等の出会だった。

2話 語らい

ガタンゴトン……

乗合馬車は一路ザルマドに向かっている。

「ではいきますね」

馬車内でリネアはリンの母親であるマリアの足を治す所である。

ちなみにリン、マリアとは先ほどまでリネアと一緒に逃げていた母親の事。

あれからこの母娘とリネア、さらにアールスとヴェルマーレの五人は街道に出た所運良く乗合馬車が通り乗せて貰う事が出来た。

右手を患部である足首に当て左手で宝石が嵌っている杖を持つ。

魔法で治療をするのだがこの世界の魔法はいわば神々の力。

魔法を行使する場合まず神に祈る事で魔力を貰う。この段階ではまだ魔力だけ、これを何かしらの効力を持たせる為に必要なのがリネアの杖にある宝石『神滅石』である。

『神滅石』とはかつて神々を滅ぼそうした存在『神滅』の力を持つ宝石。

『神滅』は神々に追いやられた後この世界アルトウマへと逃れてきた。その身を幾万以上の欠片となった『神滅』はある物へ逃げ込んだ。

それは宝石の原石。

何故宝石に逃げ込んだのか解らないが長い年月が経つに連れ『神滅』の自我は無くなり力だけが残った。

それが『神滅石』となった。

魔法の効果は元の宝石の資質による。

リネアの『神滅石』は『光花石』と言われ、光に『光花石』をかざすと光が花のように反射する事からの由来。これに魔力を注ぐ事で癒やしの魔法が行使出来る。

リネアの『神滅石』が淡く輝く。

「癒しよ……」

その光が右手へ移り輝く。

少しの後光は消える。

「どうですか？」

「全然痛くありません！」

マリアは足首を何度も動かし確かめる。

「お姉ちゃんありがとう!!」

満面の笑顔でお礼を言うリン。

「どう致しまして」

その愛らしさにリンの頭を撫でる。リネアにとっては何よりも嬉しい。

「へえー良い腕してるわね」

「……………どうも」

ヴェルマーレの言葉にぎこちなく答える。

リネアから見てこのヴェルマーレと言う女性は色んな意味で怪しか

った。

危うく貞操を奪われかけたのもあるが、それ以上に盗賊達の動きを止めたあの魔法。

いや魔法と言っているのかどうか。

魔法を使うには先程のように『神滅石』を使わなければならない。

しかし彼女はそんな様子もなかった。

ではあれは何なのか？

それこそ神々でないと説明つかない。

そこで彼女の名前を思い出す。

ヴェルマーレ。

慈愛の女神として民に愛されているその名。

彼女がその名の通り女神ヴェルマーレなら説明がつく。

(そんな分けないか…)

リネアは自分の考えに頭を振る。

確かに女神ヴェルマーレはこの世界に降りてきたと伝えられている。ただそうだとしてもあんな酒に酔い自分に迫って来たのが女神なわけがない。

それにヴェルマーレの名はそれ程珍しくない。

女神にあやかりその名を自分の娘に命名する親は珍しくないからだ。

「所であなた達は何してたの？」

リネアはもう一つ気になっていた事を聞いてみる。

助けて貰ったとはいえあの森は魔物もいる危険な場所。そんな所に居たのが気になったのだ。

「これだ」

アールスが麻袋の紐を解き中を見せる。

そこには大人の拳大ほどの石らしき物が六個入っていた。

「これは？」

「神滅石だ」

「え！？」アールスの言葉に思わず声を上げてしまう。

魔法の行使に必要な『神滅石』は貴重な物だがその理由の一つに見分けが難しい事がある。

研磨前の原石は普通の石にしか見えない為、判断するには特殊な装置が必要なのだが非常に高価で個人で持っている者は殆ど居ない。

『神滅石』を発掘する時は大量の石を運搬してギルドで鑑定してもらうのが普通。そのため大人数が必要となり『神滅石』がなかった場合は大赤字になってしまふ。それでも一つでもあれば利益になるので『神滅石』を発掘する者は後を絶たない。

「全部本物なんですか？」

そういう事もありリネアは信じられなかった。

もしこの六個の石が全部『神滅石』なら莫大な金額になるのは予想出来る。

「勿論よ、なにせ私が見たからね」

どうだと言わんばかりにヴェルマーレが胸を張る。

「何か特別な能力があるんですか？」

「私、神様だから。ほら名前がヴェルマーレだし」

「えー！お姉ちゃんヴェルマーレ様なのお！？」

リン一人が驚く。

「そうよ、凄いでしょ」

「うん！すつごおい！！」

「はあ……」

盛り上がる二人を余所にリネアは溜め息を吐く。

答えははぐらされた事は残念だがそれも当然かと思う。

もし個人でなんの装置もなしに『神滅石』の選別が出来れば巨万の富を得る事が出来る。それを今日会ったばかりの他人に言う筈はない。

だからと言ってリネアは聞いてどうかしようとゆう分けではなく興味から聞いただけである。

「着いたみたいだな」

アールスの言葉通り馬車は無事ザルマドに到着した。

リンとマリアの母娘はリネア、ヴェルマーレ、アールスの三人に礼を言い去っていった。

「本当に有り難う御座いました」

リネアは改めてヴェルマーレとアールスに頭を下げる。

「ああ」

「またねリネアちゃん」

アールスは素っ気なかったがヴェルマーレは意味深に微笑む。

「また……ですか？」

リネアは首を傾げる。

この後二人と会う約束はしていない。

「勘よ勘。私神様だから」

「じゃあね」とヴェルマーレは手を振り二人人混みに消えていった。

「またね………か」

小さく呟く。

多少非道い目に遭ったが面白い二人だったと思い返す。

もし一緒に旅が出来たら楽しいだろう。

しかし彼女にはやらなければならぬ事があった。

頭を振りリネアは前を見やり歩いていった。

3話 ギルドと情報

そこは神殿だった。

不自然なまでに白く輝くそれは幻のよう。

一人の青年が倒れている。

傷だらけで彼の体は血に沈んでいるように見える。

（これが俺の最期か……）

最早口から言葉さえ出ない青年は意外と冷静だった。

その日は朝からギルドで依頼を受けた。

登録してから五年で青年のランクはC。

ギルドのランクは上がSSSでSS、S、Aとなり一番下がHの1段階。

五年でCランクはますます早いと言える。

そんな青年が受けた依頼は克蘭ビーの討伐。

克蘭ビーとは全長一メートルもある蜂で一体だけならさほどもないが、克蘭ビーは常に十匹程度で行動するため中々の強敵と言える。しかしCランクともなればそれ程苦戦する相手ではなく青年は無難に倒した。

問題はその後だった。

討伐証明となる克蘭ビーの針の回収時にそれは現れた。

マドウルベアー。

この森の生態系の頂点に位置する魔物。

外見は熊だが二本足で立つとその大きさはゆうに七、八メートルを

超える。真つ赤な体毛は鋼以上の硬さを誇りその怪力は巨木を一撃でなぎ倒す。

とてもCランク一人では倒せる相手ではない。

青年は何とか逃げ延びたものの深い傷を負いここまで来た所で力尽きた。

自らの体が冷たくなるのを感じながら青年は走馬灯を見ていた。

物心付いた時には家は孤児院だった。両親は生きているのか死んでいるのか解らない。

十三歳の時に孤児院を出てギルドに入る。当初は簡単な依頼を請けながら体を鍛え剣を必死に修練した。危険な目には何度か遭ったが大怪我などはせず順調にランクを上げていった。

（だからって油断してたわけじゃないんだけどな）

今回はアクシデントと言って良い。

本来マドウルベアーはもつと深部にしか居ない。それがあんな所に出現したのは運が悪いの一言に尽きる。

しかし青年はそれを理不尽とは思わなかった。

むしろ冒険者という仕事は予定通りに行く事の方が珍しい。実際何でもない依頼で命を落とす冒険者はいる。

それが今回自分だったというだけだ。

青年はまだ二十年も生きていない。今までの人生は幸福ではなかったが特別不幸でもない。人はいつか死ぬ、早いか遅いかだけの問題と青年は普段から思っていたためか恐怖はなかった。

生きたい？

不意に女性の声がした。

耳からではなく直接頭の中に聞こえてくる。

（な……………んだ？）

死にたくないですか？

その声は神秘的ながらとても暖かった。

（いや、構わないでくれ）

青年は素直に今の心情を言った。

勿論死ぬのは怖い。しかし生きている以上死ぬ事は避けられない、死を否定する事は生きる事否定するのと同じなのだから。

その若さで随分と達観してるわねえ。

急に口調が俗っぽくなる。

まあいいわ。あなた私に付き合いなさい。

（……………断る）

青年には嫌な予感しかなかった。だから断った。

却下します!!

体が光に包まれると冷たくなっていた体が暖くなり感覚が戻ってくる。

（止める!!）

大丈夫よ、人生楽しませてあげるから。

目が覚めると朝日が部屋を照らしていた。

「あの時の夢か……」

アールスは寝汗で濡れた服に不愉快になりながら部屋を出る。

リネアと別れたのが昨日。

神滅石をギルドに買い取って貰うのを翌日にし、夕食をとった後宿に戻った。

隣の部屋をノックせずに開ける。

転がる酒瓶にベッドに大の字になって眠る女性。

絶世の美女と言っても良い美貌に細いながら女性を主張するその体は男なら誰でも虜にしまうだろう。だが髪はグシャグシャ涎を垂らし剥き出しの腹をポリポリと掻く姿は全てを台無しにしている。

「コレがアレだと世間は信じるかな……」

朝の爽やかな気分など欠片もない光景に溜め息をつくとそのまま扉を閉める。

起こすつもりだったが今までの経験から放置する事にした。

宿になつて二階から降り裏庭にある井戸で顔と体を拭く。少々冷たいがいい刺激になる。

一階にある食堂に入ると見慣れた女性がせわしなくしている。

「おやおはようさん。朝食はいるかい？」

「ああ頼むよ」

彼女はこの宿の女将ラメド。一ヶ月前から滞在しているためすっかり顔馴染みになっていた。

「嬢ちゃんはまだかい？」

「ありや暫くダメだ」

「アッハッハッ！！相変わらずだねえ」

豪快に笑い飛ばすラメドに苦笑いしながらテーブルにつく。

豆のスープにパン、サラダという朝食を食べていると一段落着いたラメドが話しかけてくる。

「今日ここを出るのかい？」

「ああ、ギルドに寄った後な」

「寂しくなるねえ」

ラメドは二人を気に入っていたのか色々世話をしてもらいかなり快適に過ごせた。

「暫くしたら戻ってくるかもしれませんがその時はよろしく願います」

「勿論だよ、部屋は空けとくからね。他の宿に行ったら承知しないよ！」

「はい」

「おふあよあ」

ラメドとアールスが雑談をしているとようやく起きてきたヴェルマーレが顔を出す。

「おやおやせつかくの美人がだらしないよ」

寝起きで色々酷い状態のヴェルマーレをラメドは奥へと連れて行く。

毎朝恒例の風景だった。

ラメドと別れたアールスとヴェルマーレはギルドに来ていた。ギルド内は人でごった返している。

ザルマドは各地からの街道が交差しており都と匹敵する賑わいを見せている。そうなれば必然と様々な依頼がギルドに寄せられ為此の人の多さになる。

中へ入ると二人、特にヴェルマーレに男の視線が集まる。今のヴェルマーレは起床時のだらしなさは無くラメドによって何時のモ美貌を取り戻している。このギルドに初めて来た頃はヴェルマーレに寄ってくる連中は多かったのだが、ヴェルマーレが「私を酔い潰せたなら好きにしていいい」と言い放ちギルド近くにある酒場で飲み比べが行われた。

結果は男達の惨敗。

ヴェルマーレは蟒蛇でありザルでもあった。暴力に訴える連中もいたが全て返り討ちに会い今現在ヴェルマーレにちよっかいをかける勇者は居ない。

「これを頼む」

神滅石の入った麻袋ごとカウンターに置く。

「アールスさんヴェルマーレさんお早う御座います！換金ですね」元気の良い挨拶をして来るのは職員であるクエン。茶髪のツインテールに大きい瞳から幼く見える。

このギルドでは彼女がよくこの二人の担当をする。

「少々お待ち下さい」

麻袋を持ち奥へと消える。神滅石を判別する装置を見せるのは御法

度の為ギルド内の奥にしかない。

30分程しクエンが戻ってくる。

「お預かりした神滅石六個全て本物と確認出来ました。種類は深緑石です」

神滅石は採れる場所で種類が違う。深緑石は主に森の中で採れ植物に關係する魔法が使える。

「では大金貨3枚です。お確かめ下さい」

大金貨は金貨10枚で1枚、金貨は銀貨100枚で1枚、銀貨は銅貨200枚で1枚になる。因みに普通の家庭がヶ月生活するには銀貨2、3枚有ればいい。深緑石は神滅石の中では割と安価な方だがそれでも原石の買い取りは一個金貨5枚。研磨し売りに出せばもつとする。このために神滅石を発掘する者は後を絶たないし魔法を使える者はあまり居ないという現状がある。

「依頼で受ければお二人はとうにSSSランクですよ?」

「しかし面倒だぞ?」

「ですよね」

アールス達はよく神滅石をギルドに持ち込む。

ただそれだとランクに反映されない。

依頼でも神滅石の発掘はよくある。アールスとヴェルマーレのランクは共にS。今まで持ち込んだ神滅石の数からするとSSSになっている。

しかしアールス達はわざとランクを上げないようにしている。世界でSSSランクは十人と居らず冒険者とすればだれもが目標とし夢

見る頂き。

だがそれと同時にSSSランクは国が管理する決まりがあるため自由がなくなる。

アールス達はこれを嫌っている。

「それはそうと情報をくれ」

パチツと銀貨を一枚カウンターに置く。

どうぞと渡された一枚の紙。それにはびっしりとザルマドを中心とした周辺の情報が書かれている。

冒険者にとって情報は非常に重要。ギルドの情報は一週間置きに更新され内容も確かな物。銀貨一枚は高額だが見返りは使いようによつてはそれ以上になる。

内容を読み進めて行くとある所で目線が止まる。

『グレムグレイで行方不明者多数』

「どう?」

「ほら」

アールスから紙を受け取り目を通す。

『ラザッシュで新発売、芳醇な香りと味わい深い果実酒』

「決まりね。ラザッシュに…」

「グレムグレイだ」

有無を言わずアールスはヴェルマーレの首根っこを掴み歩き出す。

「いやー！ーラザツシュの果実酒のーみーたーいー！ー！」

「終わったら寄ればいいだろう」

「逆方向でしょー！ー！」

「うるさい。黙れ」

ギアアギア騒ぐヴェルマーレを無視し引きずりながらギルドを出て行く。

それから2時間後のギルド。

一人の少女が情報の書かれた紙を睨みつけている。

『シュベルツァで新しい領主にグラハム・ギュレイ氏選ばれる』

「見つけた……………」

グシャツと紙を握り潰した。

4話 信仰心

ザルマドを出発して一週間後、アールスとヴェルマーレはグレムグレイに到着した。

ザルマドが流通の要ならグレムグレイは信仰の聖地。

慈愛の女神ヴェルマーレが自分を慕う者達と住み着いた最初の場所がここグレムグレイ。

神々を祀る教会が多数あり信者が多く住んでいる。

また冒険者が立ち寄るのも多い。理由は魔法。

魔法を使うのには神々へ祈りを捧げ魔力を貰わなくてはならない。それを教会で教えを請う為だ。

最初から出来る者は居るが極少数。大半は教会に来なくてはならない。

祈り神々に問いかける。返ってくれば成功。期間は人によって様々で1日から一生掛けても無理な者までいる。成功すれば修練次第で魔力の量や時間の短縮が出来る。

「さてまずはギルドか」

迷い無く歩き出すがふと止まる。

周りを見渡したため息一つ。

「子供かアイツは……」

ヴェルマーレがいつの間にか居なくなっていた。

とは言っても探すのは簡単で大概は飲み屋にあの飲んべえはいる。

しかしここグレムグレイだけは行き先が違う。

「ああ、面倒臭い」

実はグレムグレイには一年半前に来ている。その時の事を思い出し
アールスは暗澹な気分になった。

広大な敷地に建つ白い建物。

街の中心にあるこの建物は女神ヴェルマーレを祀る神殿。

規模も信者数もグレムグレイで一番多い。

扉を開け中に入ると広い空間が現れる。

最初に目に入るのは奥にある女神ヴェルマーレの姿を映し造られた
巨大な像。高さ十メートルはあるその女神像はローブに身を包み優
しい微笑みを浮かべている。

女神像の足元からは赤い絨毯が扉まで延び、その絨毯の両側に無数
の長椅子が並べられている。ゆうに300人以上は座れる。

「ヴェルマーレ様は仰いました『皆に等しき愛を』と」
女神像を背に穏やかに語る女性。

20歳程か、光に煌めく長く美しい金の髪。潤んだ瞳に仄かに赤く
染まる頬はまるで恋する少女のよう、所々金の刺繍の入った白い
ローブを着るその姿は神の使いと錯覚するほど神秘的に見える。

「我が身で皆が幸せになるのなら………」

女性が語っているのは『女神の詩』。

吟遊詩人が語る『女神の詩』は楽しんで聴いて貰う為に脚色してある。

しかし彼女の語る『女神の詩』は言わば原文。

信者達は胸の前で手を組み聞き入る。

女性は名をクリスミン・グレムグレイ。

遙か昔女神ヴェルマーレと共にこの地に辿りつた者達の子孫であり現在女神ヴェルマーレを信仰する者達のトップである。そのクリスミンから語られる『女神の詩』に信者達は皆心酔していた。

ただ一人を除いて。

最前列に陣取り足を組みニヤニヤしながらクリスミンを見ている。クリスミンは極力それを見ないようにしている。

信者達は居なくなりそこには二人だけ。

「あなたは立ち入り禁止にしたはずですが？」

「あら女神様はそんな器量の狭い方なのかしら？」

馬鹿にされたように感じたのだろ？クリスミンはキッと女性を睨みつける。

「あなたのような方がヴェルマーレ様の何を知っているのですか！」

「照れるわねえ」

「あなたは同じ名前なだけでしょー!!」

やれやれと首を横に振ったヴェルマーレは供え物の果物を手に取る。

「これマクベラでしょ？随分高価な供え物ね」

マクベラとは赤ん坊の頭位ある黄緑色の果物。甘味が非常に濃いのだが一つ銀貨20枚する高級品。

「触らないで下さい」

「それにこんな物まで建てちゃって」

グルツと見渡す。大きさもだが柱には細かな彫刻、はめられているガラスには鮮やかな彩色。どれだけのお金があれば足りるのか予想もつかない。

「女神様はこんな物望んでるのかしら？」

「何が言いたいんですか」

「みつともない」

「!？」

ヴェルマーレの一言にクリスミンの表情が歪む。

「この神殿は女神ヴェルマーレ様を心から慕う方々の寄付で建てられました!!あなたはその方々の心を否定するのですか!？」

「ええ」

顔を真つ赤にしまくし立てるクリスミンにあっさりと言い放つ。

「寄付したのは貴族に王族、名を広めたい商人でしょう？あなた本気でそんな連中が純粋な信仰心で寄付したとでも？」

「……………」

言い返す事が出来ないクリスミン。

全世界で崇拜されている女神ヴェルマーレの神殿の建設に寄付するのは高名を広げるには最適な手段と言える。

「しかしヴェルマーレ様の教えを広める為なら!？」

「必要ないわよ。ヴェルマーレの教えなんて大したもんじゃないんだから」

その言葉にクリスミンは怒りで狂いそうになる。しかしならなかった。

止めたのはヴェルマーレの瞳だった。

クリスミンを愛おしそうに見詰める瞳に黙ってしまう。

「色々ややこしく言ってるけどヴェルマーレの教えは簡単。みんなで仲良く暮らしましょって事だけ」

ヴェルマーレは微笑む。

「大地と青い空があれば充分。気楽にやんなさい」

「……………帰って下さい」

何とか言葉を絞り出す。それ以上は言えなかった。

「待たね」

去って行くヴェルマーレにクリスミンは俯く。

「そんな事言われなくても……」

誰も居なくなつた神殿内で一人眩き服に入れていたペンダントを手取る。

銀の装飾が施された台座にはめられた宝石。一見しただけではその形を確認出来ない程の透明感を誇る。クリスミンの母の形見でありこの神殿の主である証。
それを握り締め涙する。
己の無力さ母への想い。

（母様………私はどうしたら………！？）

突然首に僅かな痛みが走る。途端意識が遠くなりそして途絶えた。

「やつぽ」

神殿から出たヴェルマーレはアールスと鉢合わせする。

「やつぽじゃねえ」

そう言いながらアールスはホツと胸をなで下ろす。

前回の時は数百人の信者達に取り囲まれ酷い目にあつた。

「何処行つてた？」

「女神様に会いにね」

しれつと言うヴェルマーレ。

アールスはヴェルマーレの背後にある建物を見てため息を吐く。

「お前悪趣味だぞ」

「失礼ねえ」

「大体お前何でグレムグレイに来た時だけあそこに行くんだよ」
アールスにしてみればまだ飲んだくれていた方がマシ。

「あの位の頃は可愛かったんだけどね」

ヴェルマーレは近くで遊ぶ子供達を見て呟いた。

「はぐらかすな」

アールスはヴェルマーレの頭を軽く小突いた。

5話 誘拐

「母様、ヴェルマーレ様ってどんな方なの？」

「ん〜そうね……」

少女は眠たそうな眼を母へと向ける。

「とても優しい方よ」

「そうなんだ〜」

ニッコリと微笑む少女。

「会いたいなあ」

「会えるわよ」

母は少女の髪を撫でながら言う。

「本当？」

「本当よ」

「楽しみだなあ……………」

「ふふ、おやすみミン」

目が覚め、徐々に意識がハッキリしてくる。
取り敢えずクリスミンは現状を把握する。

服は変わりなし、足首と両手首は後ろで縛られ周りは薄暗く松明の
臭いが鼻に付く。

「起きたか」

声のした方に顔を向けるとそこには見知った男が居た。

「ジュカナ!？」

クリスミンとは真逆な黒いローブ姿、顔色は悪く青白い。

「一体何のつもりですか!？」

声を荒げるがジュカナは微笑したまま動じない。

「目的ですか?これですよ」

突き出した右手にぶら下がる見覚えのあるペンダント。

「!?!返さない!!」

クリスミンは出せるだけの怒声をジュカナにぶつける。

「何度見ても見事ですなこの『天晶石』は」

しかしクリスミンの声など気にせずペンダントに見入る。

「せっかくですのであなたは見学してして下さい」

「何を言ってるの……」

様子のおかしいジユカナにクリスミンは言いようのない恐怖を感じる。

「邪神様が復活されます」

そして狂ったように笑い出した。

ヴェルマーレは不機嫌だった。

宿を取り夕食を済ませたアールスとヴェルマーレ。

ヴェルマーレは十数本の酒を買い込み部屋で楽しむ筈だった。

宿に帰った二人を待っていたのはギルドマスターのグインだった。

4、50歳位で緑の短髪に糸のような細い目。何よりヴェルマーレが嫌っているのがブクブクと太ったその体。

ヴェルマーレ曰わく「生理的に潰したくなる」らしい。

そんな事なのでサッサと部屋に逃げようとしたのだがアールスが捕まえた。

普通ならそのまま部屋に行かせるアールスなのだがギルドマスター

であるグインはアールスとヴェルマーレの二人を訪ねてきた為無理矢理ヴェルマーレを同席させている。
ギルド相手に揉めると後々面倒な為である。

「で、用件は？」

「はあ……」

グインはチラツとヴェルマーレを見やる。
ヴェルマーレはそっぽを向きふてくされながら酒を呷っている。

「気にしないでいいから」

アールスにしてみれば喚かれるよりマシ。

「ある人の行方が分からなくなりました」
アールスとヴェルマーレが反応する。

二人がグレムグレイに來たのがこの街で行方不明者が多数でているとギルドの情報で知ったからだ。

「それは最近この街で起きているというあれですか？」

「恐らく違うかと……」

「根拠は？」

「行方不明者は全て子供なのです、今回は大人の女性でしてしかも地位のある方で……」

「ふん、それで私達に搜索しろと？」

「そ、そんなしろだなんて！？ただSランクはお二人だけでして手を貸して欲しいと……」

グインは吹き出る汗を拭く。

「じゃあ結論から言っわ、……………嫌!!」

「ま、待って下さい!？」

席を立ち二階の部屋に行こうとするヴェルマーレをグインは慌てて止める。

「勿論他の者達にも搜索をさせています!その人の行方が分からなくなっただのが世間にバレるとまずいのです!!」

「知、ら、な、い、わよ!!」

二階行こうとするヴェルマーレにすがりつくグイン。

「分かった、俺が請ける」

やっぱりこうなったかとアールスは嘆息する。

ああなるとヴェルマーレは絶対首を縦に振らない。

そうアールスが言っとヴェルマーレは微笑みグインはホッとした顔をする。

「おお!？有難う御座います!!」

グインはヴェルマーレから離れアールスの向かいに座り直す。

「んじゃ後はよろしく」

ひらひらと手を振るヴェルマーレにアールスは片手でシッシツとする。

「それで誰が居なくなっただんですか？」

「クリスミン・グレムグレイ殿です、御存知ですか？」

「何ですって!？」

突如ヴェルマーレが階段を駆け降りグインの胸倉を掴む。

「どういう事よ!？」

「こ、これが神殿に置かれていまして……」

戸惑うグインが一枚の紙をヴェルマーレに渡す。

それを真剣に見入るヴェルマーレ。アールスは横から覗き見る。

『邪神様の為にクリスミン・グレムグレイを貰い受ける』

「クリスミン殿は女神ヴェルマーレを信仰する信者達のトップです、こんな事が公になれば街は大混乱します」

「おいヴェルマーレ!？」

無言のままヴェルマーレは宿を出て行ってしまう。

「ったく!？」

後を追おうとしてグインに振り向く。

「この依頼を請ける、報酬はそっちで決めてくれて構わない。ただしギルドランクには反映させないでくれ」

そう言い放つと返事を聞かないままヴェルマーレの後を追った。

「待てっ！」

ようやく追いつき肩に手を置く。

「知り合いなのか？」

「……………まあね」

振り向かず答えるヴェルマーレ。

ヴェルマーレは基本的に揉め事には無関心でこんな状態は非常に珍しい。

「居場所は分かるのか？」

無言で歩くヴェルマーレに問い掛ける。

「あの子は珍しい『神滅石』を持ってるからその後を辿れば分かる」

そうは言うがそんな事が出来るのはヴェルマーレだけ。

アールスはそれから黙って後をついて行く。

細い路地を抜けると目の前に屋敷が現れる。

夜の闇に浮かび上がるその屋敷は人の住む気配がない。

「何の用だお前ら」

計5人の男が2人の前に立ちふさがる。

それぞれ簡単な防具に既に抜かれている剣。

「ここか？」

小声の問いにヴェルマーレは頷く。

人気のない屋敷の前に武装した男5人。何か有りますよと言ってい

る様なものだ。

「とつとと帰んな」

男達は皆半笑い。アールスとヴェルマーレを見て大した相手ではないと判断したのだろう。

「邪魔……」

ヴェルマーレが言い終わる前にアールスが跳ぶ。

「が!？」

首筋を叩かれた男が倒れる。

突然攻撃して来たアールスに男達は身構えるものの抵抗する事さえ出来ず全員叩き伏せられる。荷物から縄を取り出し素早く男達を縛り上げるアールス。

「お前殺すつもりだったろ」

「さあ？」

惚けるように肩を竦めるヴェルマーレだがある程度付き合いの長いアールスには分かる。あのままアールスが何もしなければヴェルマーレはこの男達を殺していたと。

(誰だよコイツをこんなに怒らす奴は)

ガシャーン!!

突如響いた騒音に思考を止める。

見るとついさっきまでそこにあった鉄製の門は無く、そこらにそれらしい残骸が散乱していた。

（あいつの知り合いに手を出したのが運の尽きだな）

アールスは犯人の不運を気の毒に思いつつ無言で屋敷内に入るヴェルマーレに続いた。

6話 現実

ジユカナ・ダルベル。

貴族の端くれでありこのグレムグレイで唯一の女神ヴェルマーレ否定派である。

神殿建設の際も反対し、しばしばクリスミンに抗議していた。そのジユカナが一年程姿を見せなくなった。

当初気になっていたクリスミンだったが次第に忘れていった。

それが久々に姿を現したと同時にこんな行動に出るとは予想出来ない事だった。

「……………邪神？」

クリスミンは頭を傾げる。

この世界に邪神という神は居ないとされている、精々物語の中だけ。

「お前達のようなヴェルマーレに陶醉している連中から見ればな」

ジユカナは部屋の中央に置かれている岩に手を添える。

この部屋は床や壁、天井全てが剥き出しの石で囲まれており広めの牢屋のよう。

「この岩に我ら一族が神と崇める方が封印されているのだ」

「それに？」

その岩は山のような形で大きさは大人5人程で囲める位。黒ずんでおり普通の岩に見える。

「そしてその封印をしたのが…」

「くっ！」

ジュカナはクリスミンの髪を掴み顔を無理矢理上げさせる。クリスミンはジュカナを睨みつけるが相変わらず意に介していない。

「お前達のヴェルマーレだ」

「あなた何を言ってるの？」

クリスミンはヴェルマーレに関する知識や情報は自分以上の者は居ないと自負している。なにせ先祖がヴェルマーレと一緒に暮らして居たと言い伝えられており様々なその情報は他に漏れるのを頑なに禁止しているから。

そしてクリスミンはそんな話を聞いたことがなかった。

「約2000年前この地にはその神と我ら一族が平穏に暮らしていた。ヴェルマーレはそんな我らの神を邪魔だとし一方的にこんな薄汚い岩に封印したのだ！！」

「嘘よ！！」

すぐさまクリスミンは反論する。

クリスミンにとってヴェルマーレは全ての人達に慈愛を施す尊い女神。ジュカナの言うことは到底信じられなかった。

「我ら一族はそれから今までこの岩を守護して来た、我らの神が蘇る日まで」

クリスミンの髪から手を離し両手を天に向け広げる。

「そしてようやくその方法が分かったのが一年前。準備は整い起は熟したのだ」

ジュカナはクリスミンのペンダントを掲げる。

「この『天晶石』が鍵なのだ」

「ふざけないで下さい！！それは確かに希少な物です、しかし『天晶石』は魔力を注ぎこんでも何の属性も付与されません！！」

その他の『神滅石』は魔力を注ぐ事で何かしらの属性が付与され魔法を発動出来る。

『天晶石』は何の属性も付与されない、神から授かった魔力をそのまま放出だけで取り立てて役に立つ物ではない。

「それが重要なのだよ」

「え……………」

「我らの神を復活させるにはこの岩に魔力を与えなければならない事が分かった。しかしその際属性が有っては拙いのだ、ただ純粋な魔力でなければならない」

「そ、そんな…」

「神は蘇る！！そしてヴェルマーレに代わり世界は我らの神を崇めるのだ！！」

ジユカナは歓喜に震えた。長年の宿願が今まさに叶う事に。

「ヴェルマーレ様を敬愛する私達の心は変わりません！！」

「ふん、だからお前は周りから小娘呼ばわりされるのだ」

「な！？」

「教えを広める立場でありながら世間知らずの小娘と言っているの

だ。いるかどうか分からない神より實際目に映る神に心奪われるのが人なのだ」

そう言われ、不本意だがジユカナの言葉に反論出来なかった。

クリスミンは自分が陰で良く言われて無い事を薄々気づいていた。

母が急に亡くなり心構えをする暇もなく後を継いだ。自分なりに精一杯やってきたつもりだがそれが周りの評価に繋がるとは別なのは理解していた。

「そこで見ているがいい！！我が神の復活を！！」

『天晶石』から眩い光が放たれ岩に吸い込まれ行く。

（母様、ヴェルマーレ様は本当にいらっしやるのでしょうか……）
クリスミンはその光景を傍観しながら幼き日に母と交わした話を思い出していた。

7話 邪神と女神

屋敷に入ったアールスとヴェルマーレは迷うことなく目的の場所へ向かっていた。

「こら！！危ないだろ！？」

目の前に飛んできた木っ端を弾き飛ばす。

二人は地下へ階段を降りている。

何ヶ所か扉があったのだがヴェルマーレは開けるのも面倒なのか一撃で粉碎していく。それで迷惑しているのがすぐ後ろに居るアールス。

先ほどから何回かその事を言っているのだが返答は無し。
なのでもう諦めている。

ヴェルマーレの脚が止まる。

「どうした？」

アールスが覗き込むとそこには鉄製の扉が立ちふさがっている。
今までの木製の扉は訳もなく粉碎してきたが流石に鉄製はそうはいかないようだ。

「俺の出番か」

アールスは懐から一本の針金を取り出す。
反対側から南京錠のような物で閉められていたら手出し出来なかったが、見たところ鍵を差し込む仕様。

冒険者なら多少の錠前は開けられる。アールス程のランクなら尚更。

ヴェルマーレを退かそうと肩に手を置くが動こうとしない。

「急ぐんだろ？なら……」

アールスが言い終わる前にヴェルマーレは扉に蹴りを入れる。

バキャッ！！

扉は見事に吹っ飛ぶ。

「…………溜めがいるだけだったか」

アールスは静かに針金を仕舞う。

「うつ！？なんだ！」

突如扉側から眩しいほどの光が目差し込んでくる。

二人は中へ飛び込んだ。

そこは地下にしては広く一面剥き出しの石の部屋。

光は中央にある岩から発しており隣にはやせ細った男と縄で手足を縛られた女性が倒れている。

「ミン！！」

ヴェルマーレは確認すると一目散に女性へ駆け寄る。

「大丈夫！？怪我はない？」

「何故あなたが……」

クリスミンにしてみれば親しいとは言えないヴェルマーレが個々にいる理由が分からなかった。

ヴェルマーレは縄を切り拘束を解き戸惑うクリスミンの体をペタペタと触り出す。

「あ… ちょっと変なところ触らないで!？」

「ふむ、どうやら大丈夫なようね」

顔を真っ赤にして抗議するクリスミンだがそれを余所にヴェルマーレは胸をなで下ろす。

「ふははは!! 今更来ても遅い!! さあ、目覚めて下されえ!!」

ピシッ。

岩に無数の亀裂が走り裂ける。

一段と強い光が岩から放たれ暫くするとそこに一人の男が居た。

二十代後半程、肩まである黒髪に深い緑の瞳。美男子と言っている容姿。

「これが神………」

クリスミンは動けなくなっていた。

普通の人間に見える。しかし男から湧き出る物に圧倒されている。魔力。

それはクリスミン自身が今まで感じた事がない程大きく強力なものであり到底人から発しているなど信じられなかった。少なくとも人以上の存在、言ってしまうえば神なら納得出来る。

「御気分は如何でしょうか、レイスニグル様」

ジュカナは片膝を付き男から一步離れ頭を下げる。

「……………悪くない」

確かめるように体を動かす。

「どれほど経った」

「2000年で御座います」

「そうか……………お主名を何と言う」

「ジュカナと申します」

「ではジュカナよ、何を望む」

威厳に満ちたレイスニグルをジュカナは強い眼差しで見上げる。

「レイスニグル様による世界統一を」

「良かるう」

ただ一言そう言った。

「はっ！有り難き幸せ……………」ジュカナは今自分が人生の最高潮に
いると実感していた。

「ん？」

レイスニグルの目線がクリスミンとヴェルマーレを捉えた。

「ほお……」

ニヤリと口元を歪ませた二人に近づく。

「あ……あ……」

「……………」

「……………」

恐怖で体が動かないクリスミンに無言のヴェルマーレ。アールスは黙って二人から離れる。

「美しい……………感謝しろ女。お前を私の女にしてやろう」

「い……………や」

手を延ばすレイスニグルに震えるしかないクリスミン。

ガシッ。

しかしその手を掴んだのはヴェルマーレ。

「何だ女？お前も後で遊んで……………」

「この子に薄汚い手でさわるんじゃない！……」

バキヤッ！！

「ぶべら……！」

ヴェルマーレの右ストレートがレイスニグルの顔面にめり込む。レイスニグルは二度三度バウンドしながら壁に激突し止まる。

クリスミンとジュカナは目の前で起こった事についていけず啞然としアールスは呆れたように見ている。

「き、貴様あ！！よくも我の顔を殴りよったなあ！！」
激情がレイスニグルを支配する。

「はあ？私だってあんたの顔なんか触りたくないわよ。あーばっち
い」

対象的にヴェルマーレは相手を馬鹿にするように言いながら右手を
丁寧な布で拭く。

「くつくくつ、少々腕が立つからと調子に乗った事を後悔するが
いい！！」

凄まじい速度でヴェルマーレに迫るレイスニグル。

が、

「ぐぼお！！」

あっさり避け腹へ膝蹴り。

「あがあ！！」

床へ叩き伏せ、

「ぐげげ」

頭を踏みつける。

「ぺっ」

おまけのツバ吐き。

「あゝあ、どっちが邪神だ……」

あまりの容赦の無さに呟くアールス。

「お前……一体何者だ……」

満身創痍のレイスニグルはヴェルマーレを見上げる。

「まだ寝ぼけてんの？よく見なさい」

ヴェルマーレを凝視しすぐさま顔色を変える。

「ま…まさかお前ヴェルマーレか!？」

「お前とは何だ」

グリユツ。

「うおおー!! 割れる割れるうー!!」

「何だったら本当に割ってみましょうか？」

「済みません!! 済みません!!」

「あ、あなたまさか本当の……」

立ち上がったクリスミンが恐る恐る聞く。

ヴェルマーレは苦笑いし仕方なさそうに口を開いた。

「私はヴェルマーレ。一応世間では慈愛の女神って言われてる神様
………テヘ♪」

クリスミンは卒倒しそうになった。

8話 真実と思い出

クリスマスにとってヴェルマーレは全てと言って良い。
大好きだった母が語ってくれたヴェルマーレの色々な話。
憧れ次第に心酔していった。

どんな方なのかと幾度も夢見た相手。

それが……………

「あなただったなんて……………」

がつくりと膝を付き両手を床に下ろしうなだれる。

「そ、そんなにガツカリする？」

「まあ無理もないわな」

あまりのクリスマスの様子に若干傷付くヴェルマーレにウンウンと
頷くアールス。

「じゃあ何ですかあなた？自分が祀られている神殿でわざわざ私に
文句を言いに来てたって事ですか！？」

「いやあ、文句ってわけじゃ……………」

「ま、悪趣味の一言だな」

掴み掛かるような勢いのクリスマスに後ずさるヴェルマーレ。それは
違うと言い切れないため言葉に詰まる。

「そんな……………」

騒ぐクリスミン達と対象的にただ茫然自失のジュカナ。

「いくら相手がヴェルマーレとは言えレイスニグル様が一方的にやられるなんて」

「ん？どんな話になってんの？」

ヴェルマーレの疑問にクリスミンは聞いた話をする。

「そんな話になってんの？」

「そうだ！！お前は罪の無いレイスニグル様をこんな汚い岩に封印したのだ！！慈愛の女神が聞いて呆れるわ！！」

憎しみの籠もった言葉をヴェルマーレにぶつけるジュカナ。

「へえ」。ま、2000年も経てば事実も捻れるんでしょうねえ？」

未だヴェルマーレに頭を踏まれているレイスニグルをチラッと見る。

「我は知らんぞ！！こ奴らが勝手に言っている事だ！！」

「自分を慕っている人にその言い草はなんだ」

グリリツ。

「ぬおおー！！割れる！！本当に割れるう！！」

「何の話だ？」

怪訝な顔をするジュカナ。

「コイツ（レイスニグル）とはあっちの世界で知り合いだったの」
あっちとは神々の世界の事。

「でもとある事情でこの世界に追放された」

「や、止めてくれ!!」

レイスニグルは必死に懇願するがヴェルマーレはこれ以上ないほどの笑顔を浮かべ、

「お偉いさんの奥さんに手を出したの」

「「「は?」」」

これにはアールス、クリスミン、ジュカナの三人は間拔けな声を上げる。

「昔から手癖は悪かったけどまさかあんな事するとはね。でもこの後『神滅』が現れてコイツは難を逃れた。何が幸いするか分からないもんだわ」

「そ、それが何だと言っただ!？」

「んで、私がこの世界に来た時に偶然この街で会ってね、あっちの世界での事を話したの。そしたらコイツどうしたと思う?」

ヴェルマーレの問いに三人は何も言えないしていると満足そうに頷き、

「恐がってこの岩の中に逃げ込んだの」

シーンと静寂に包まれる地下室。

「逃げた？」

「おいおい本当にか」

キョトンとするクリスミンに呆れるアールス。

「私もビックリしたわよ。昔からへなちよこだったけどまさかそこまでとはね。それで今会ったのがそれ以来って事」

「嘘を言つな！！出鱈目言いおつて！！」

「なら本人に聞いてみたら？」

そう言つとヴェルマーレはレイスニグルから退く（蹴りを加えるのを忘れずに）。

「嘘だと仰つて下さいレイスニグル様！」

嘘だと信じたい。ジユカナはその一心でレイスニグルにすぎる。

「……………本当だ」

しかしレイスニグルはそのジユカナから逃げるように視線を逸らす。

「我より力のある神は山ほど居る。それが『神滅』という存在に何百何千の神が殺されたと聞き恐怖した、しかもその『神滅』がこの世界に降りて来たと言う。我のような者では太刀打ちなど出来る分けがない。だから……………逃げたのだ、魔力も絶つて」

「で、では私は……………私の一族は一体今まで何を……………」
ジユカナは上を見上げたただ呟く。まさに茫然自失。

「ミンを攫った事は大目に見ましょ。後始末はギルドの連中がやるでしょうし気の毒すぎて怒る気も失せたわ」ジユカナの様子に溜め息一つ。

「後はアンタの処遇ね」

ヴェルマーレはジユカナに近づきクリスミンのペンダントを取る。

「我をどうする気だ!?!」

威勢はいいのだが膝が震えてたりする。

「邪な事を出来なくするのよ」

ペンダントをレイスニグルに向かい垂らす。

「この『天晶石』は無属性の魔力を放出する他にもう一つ特長がある。それは逆、つまり……………」

「!?!」

意味が分かったのかレイスニグルは逃げようと背を向ける。

「この石が放出した魔力のみを吸収出来る」

「止めるおー!!」

逃げようとしたレイスニグルの襟首を掴みペンダントを突き付ける。

ペンダントの『天晶石』は眩いばかりの光を発する。

時間にして2、3分の間その光に照らされたレイスニグルは両膝を床に付け呼吸を荒くする。

「何をしたんだ？」

「『天晶石』を介して魔力を私に移したの。今のアイツは子供程度の力しかないわ」

アールスの疑問にヴェルマーレはサラツと答える。

ヴェルマーレやレイスニグルなどの神と呼ばれる存在の力の源は魔力である。人は魔力を魔法として使うが神にとって魔力はイコール強さ。魔力が大きい程単純に戦闘能力が高い意味になる。

レイスニグルがヴェルマーレの動きに付いていけず一方的にやられたのはそれ程二人の間の魔力の差があるというわけになる。

「これから色々大変だろうからこき使ってやんなさい」

「え、ええ」

クリスミンは何とか返事をした。

あれから暫くし搜索隊が屋敷に乗り込みジュカナとレイスニグルを拘束した。

ジュカナは相変わらず呆けたままで尋問は出来ず代わりにレイスニグルが受けている。尋問している者はまさか自分が端くれとは言え神に尋問しているとは思わないだろう。

三日後。

ヴェルマーレとアールスはこの街を発つ前にクリスミンの神殿に来ていた。

「お世話になりました。特にヴェルマーレ様には色々と」

「何か嫌みに聞こえるんだけど」

「まさか、女神様相手に嫌みを言うなんてそんな大それた事」と、言いつつ悪びれた様子は一切ない。

ヴェルマーレが本物の女神と知ったクリスミンは当初混乱していたが直ぐに元に戻った。しかし少し変わった所も、以前はピリピリしていた受け答えが今はどこか自然体に見える。

「えーと、やっぱりこんな私がヴェルマーレだって知って落胆した？」

「はい。それはもう」

即答だった。

「無作法で言葉使いは悪くて暴力者。他の信者の方々にはとてもではありませんが貴女が女神様とは言えません」

「まったくその通りだな」

「う……………」

流石のヴェルマーレも言葉が詰まる。

クリスミンはそんなヴェルマーレを見てクスリと微笑み、

「でもとても優しい方だと分かりました」

「そう？」

照れたのかそつぽを向く。

「またいらして下さい、その時は……………」

「一緒にお酒でも飲む?」

クリスミンは首を横に振り、

「その時こそはあなたを言い負かせてみせます」

「可愛くないわねえ。子供の頃はあんなに可愛かったのになあ」

「……………え?」

ヴェルマーレの言葉に首を傾げる。

クリスミンの記憶では子供の時に会ったことはないはずだった。

「あなたのお母さんとは昔からの友達でね、あなたが私に会いたいつて聞いて行つたの。でも寝てたけどね」

「よく言つてたわ自慢の娘だつて。でも純粹過ぎるのが心配だつて」

「母様がそんな事を……………!?!」

ふと思つた。

ヴェルマーレが何度も此処に来て自分に話し掛けてきた分け。

「じゃあもう行くわね」

「あの!?!」

背中を向けたヴェルマーレに声を掛けるが続かない。

何と言って良いか分からない。
しかし必死に言葉を探し、

「美味しいお酒用意してますから!!」

「いいわねえ、なら絶対また来るわ」

そう言い残しアールスとヴェルマーレは神殿を後にした。

クリスミンは両手を胸の前で組み跪く。

「有難う御座います」

独りになった自分を見守ってくれた母の友人にクリスミンは礼を言い、そして祈った。

9話 酔っ払い

闇夜を駆ける少女。

傷を負った右腕を抑えながら苦悶の表情を浮かべている。

止まり物陰に身を潜める。

雲に隠れていた月が現れ月光が路地を照らす。

「絶対この辺りに居る筈だ、探せえ!!」

男の怒号が響き一斉に無数の足音が動く。

(こん……………な…所で…………)

少女の意識は遠のいていった。

「ふ〜ふふ〜ん♪」

夜道を歩く一人の女性。

かなりの美女だが頭に何故か鉢巻き、顔は真っ赤で千鳥足。

ヴェルマーレだった。

クリスミンと別れグレムグレイから現在シュベルツァに居る。

元々二人がグレムグレイに行ったのは行方不明者が多発している情報を知った事から。

結局グレムグレイではそれ以上の事は分からなかった為、近隣の街であるシュベルツアを訪れていた。

ここシュベルツアは貿易街ザルマドや宗教街グレムグレイのように特長がある分けではないが、商売や農業などが盛んなため生活水準は高い。

そうになると食事や酒などの物は自然と良質になる。

酒をこよなく愛するヴェルマーレにとつては嬉しい限りだ。

例によりアールスは一足早く宿に戻りヴェルマーレは夜更けまで酒場で楽しんだ。

「おや？」

ヴェルマーレは足を止め耳を澄ます。

路地裏から何人もの声がした。

夜の仕事をしている以外の人はもう寝ている時刻。

ヴェルマーレが歩いている大通りは街灯の灯りで照らされているが路地裏にそんな物はない。

つまり何か厄介事が起きていると思って間違いない。

ニヤリとするヴェルマーレ。

普段は面倒くさがりのヴェルマーレだが上機嫌の今は何でも来い状態。

「んふふ」お姉さんがあつと言う間に解決してあげるわよ」

鼻歌交じりで路地裏へと入って行く。

大概は後で後悔する事になるのだが酔っ払いにその思考力はなかった。

「お、猫ちゃ〜ん♪」

ニヤアと一鳴きし猫は家の屋根伝いに姿を消す。

「ああん、いつちゃった」

名残惜しそうに猫を見送り更に進む。

木箱や空の酒瓶などが転がっている上に人独り通れる位の道幅しかなくしかも暗闇。普通に歩くのも困難なのだがヴェルマーレはスイスイと進む。

暫く進むと家一軒ほどの空き地に出る。

「おやおや〜」

隅に人の足らしき物が積まれた木材の影から見える。

「かくれんぼ？んふふ〜みつけえ♪」

スキップで近づき姿を確認する。

それは15〜6程の少女。寝ているにしては呼吸は荒く酷く汗をかいている。

原因は直ぐに分かった。

少女の右腕には血がこびり付いており、傷口を見てみると紫色に変

色していた。

「ふむふむ……ジガ草の毒ね」

一目で見抜くヴェルマーレ。

ジガ草は森の日陰に生育する植物。根には毒を持ち、現地に住む人間は狩猟に用いる。人がその毒を負った場合、死ぬことはないが暫く体の自由が取れなくなる。

「こんなのお茶の子さいさい」

傷口に手をかざし淡い光が出て消える。

すると傷は消え少女の表情が穏やかになる。

「貴様その女の仲間か」

「ん〜？」

振り向くとそこには全身黒い服の連中が5人居た。

明らかにその視線には敵意が籠もっており一触即発の雰囲気を出している。

「仲間かと聞いているんだ」

小さいが冷淡な声がヴェルマーレに向けられる。

「……………なる程」

ポンツと手を打つ。

「この子は賞品ってわけね」

「何を言っている？」

「そうかそうか。この子を手に入れたくば我々を倒せって設定ね」
全くの見当違いだが今のヴェルマーレにとってはどうでも良い事。
頭で勝手に自分の都合の良いように変換していた。

「返答がないのなら……………」

口調に苛立ちを見せ5人は刃物を構える。長さから剣ではなく短刀の類いだろう。

が、次の瞬間5人は宙を舞った。

激しく地面に叩き付けられ起き上がれない。

「ば……………かな…」

「いえーい♪んじゃ賞品貰ってくねー」

状況が理解出来ない中、女性が喜び勇んで少女を抱きかかえて行ったのを最後に意識が途切れた。

翌朝。

アールスは固まっていた。

何時ものように起きたアールスは何時ものように隣の部屋の扉を開けた。

そこには何時ものようにだらしなく寝ているヴェルマーレが居る。

しかし何時もと違う光景がそこにあった。

ヴェルマーレの隣に少女がいる。

我に返ったアールスはツカヅカと中に入りヴェルマーレの胸ぐらを掴み無理やり上半身を起こ上げらせる。

「起きろコラッ!!」

激しく揺らし容赦なく往復ビンタを浴びせる。基本的に冷静なアールスにしては珍しく切羽詰まった様子だ。

「ん…………んにゃあ…………」

何とか起きたようだがまともに瞼が開かず半眼。まだ夢の中のような。

「この子をどこから攫ってきた!!」

そんなヴェルマーレにアールスは少女に指を差し詰問する。

「んう…………何?」

「とぼけんな!!遂にやつちまったんだな!!」

まだ起きていないヴェルマーレなのだが余程頭に血が昇っているのかアールスは構わず責め続ける。

「お前が男女問わず可愛い好きは知っていた、それは別に良い。しかしだからと言って攫うなんて外道な事をするとは思わなかったぞ!!」

「あれこの子?」

「誤魔化そうとしても無駄……………ん?」

2人して少女の顔をマジマジと見る。その少女に2人は見覚えがあった。

「リネア？」

あの少女に瓜二つだった。

10話 望まぬ再会

食堂は朝食時とあつて賑わっていた。

香ばしく焼いたパンに瑞々しいサラダ、温かい野菜と魚のスープなどがテーブルに並んでいる。

中々美味しいがさほど値段は高くないのがこの食堂が人気の理由だった。

各テーブルでは世間話やこれからの仕事内容などが騒がしいほどに語られており1日の始まりを感じさせる。

「私の言うとおりだったでしょ」

「まあな」

その一角にヴェルマーレ、アールス、リネアの三人が居た。

あの後起きたリネアは訳が分からなかった。

追っ手に追われ意識が無くなり目を覚ますと、ザルマドで別れた筈のヴェルマーレとアールスが居り何やら揉めていた。そこでヴェルマーレとリネアがそれぞれ昨夜遭った出来事を話しヴェルマーレの無実は一応証明出来た。

「攫ったんじゃないくて保護ね」

「保護と言うより拾ったという感じだがな」

事実ヴェルマーレにはその時リネアを保護したという自覚はない。しかしそんな事は大した違いではなかった。

「一緒一緒」

「ふう……いいよもう」

機嫌良くサラダを頼張るヴェルマーレを余所にアールスは疲れた様子を見せる。

話を聞けばヴェルマーレに否はない。

（それにしても…）

チヨビチヨビとパンを千切り食べているリネアを見やる。

話によるとリネアが誰かに襲われていたらしい。

らしいと言うのは大まかな話はしてくれたが相手が誰でどういった経緯が有ったかには口をつむんでいる。

ヴェルマーレの話から予測すると相手はただの暴漢ではない。それは毒を使っていた事。

ジガ草はここシュベルツア付近には無く北方の森にしか群生していない。しかもその使用は極一部の現地民族にしか認められていない。

そんな物をこんな街中で使っているとかなり拙い連中となる。

大雑把な見解になるが恐らく『裏』の関係者の可能性大。

また新たな面倒事にアールスは頭が痛くなる。とは言えそのままリネアが攫われたり殺されるよりは勿論マシではある。

「ご馳走さまでした。ではこれで」

料理を残したまま立ち上がりそのまま食堂を出て行くリネア。

「あらら反抗期かしら？」

「お前に対してな。ついて行った方がいいんじゃないか？事情は知らんが一人にしないほうがいいだろ」

「まあそうね。んじや行ってくるわ」

クイツと食後の紅茶を飲み干し席を立つ。

「俺はギルドに寄る。宿で待っていてくれ」

「オッケイ。それまでに詳しい事をあの子の体に聞いとくわ」

「止めろって…」

夜は酒場などで賑わう歓楽街のこの通りだがさすがに朝は人通りは少なく閑散としておりリネアはそこを歩いている。

（まさかあの2人に会うなんて）

意識を失ったあの夜から目を覚ましたらヴェルマーレとアールスが居り、話を聞けば以前のようにまたヴェルマーレに助けられた様だった。

もう会うことはないと思っていただけに リネアの驚きは相当だった。

偶然とは言え二度も助けて貰った。恩人であるし、もっと丁寧に礼は言うべきだった。

しかしとリネアは頭を振る。

自分があの2人と知り合いだと奴らにバレるわけにはいかなかった。

これは自分の問題。

自分一人がやらなければならぬから。

「みっけっ」

むにゅ。

「うひゃあ!？」

「これは中々……着痩せするタイプね」突然胸を揉まれ慌てて逃れ後ろを振り向く。

「やつほ」

「ヴェルマーレさん!？」

そこにはヴェルマーレが居た。

「いつの間に!？」

リネアはまさかと驚く。

尾行されていないか細心の注意を払っていたのに。

「甘い甘い、修行が足りんよ。なんてね」

そんなリネアの心境を察したのかヴェルマーレは悪戯っぽく言い放つ。

「で、何避けてるのかしら」

「助けて頂いたのは本当に感謝しています。でもこれ以上私に関わるのは……」

「私とアー君に迷惑が掛かると?」

「……はい」

リネアは苦悶の表情を見せる。

「でももう手遅れよ?」

「え?」ヴェルマーレの言葉にリネアは青ざめる。

「アー君の跡をつけてった連中いたわよ」

「そ、そんな!?!」

「まあ待ちなさいって」

走り出すリネアを呼び止める。

「何故止めるんですか!?!早く助けに行かないと!?!」

「平気平気」

「平気なわけありません!?!」

自分を襲った連中は少なくとも素人ではない。そして自分が助かったのはただ運が良かったただけだとも理解している。

アールスがどれほどの強さカリネアには分からないが無傷で済むほど弱い相手ではないとだけは分かる。

「私達はじっくりお話しでしょ」

しかしヴェルマーレは全くと言って良いほど気にする様子無く、リネアの腕を掴み引きずるように連れ出す。

「ちよっ!?!あなたアールスさんが心配じゃないんですか!?!」

「私がアー君を?まさか」

馬鹿馬鹿しいとばかりに鼻で笑う。

「そんな柔な鍛え方させてないわよ」

11話 素性の分からぬ者

裏路地に入り迷路のような道を潜り抜け階段を降り扉の前で止まる。

トントン。

ノックを二回。

トントントン。

すぐさま三回。

カチャッ。

音の後、扉が開く。

中に入る。

其処は酒場のようなだが散らかっており埃が溜まっている事から今は営業していないと予想出来る。

「いらつしゃい」

奥から出て来たのは老人。

頭髮は無く白い口髭が地面に付くほど長い。腰を曲げ杖を頼りにヨロヨロと近付いてくる。

2人はボロボロのテーブルを挟み椅子に座る。

「最近この街に子供が持ち込まれていないか？」

「そうですね……」

老人は髭をさすりながら頭の中の情報を探る。

「子供……かどつかは分かりませんが、ある場所に他の街から何かを持ち込まれているようすな」

「ある場所？」

銀貨を三枚テーブルに置く。

老人は二枚だけ取り懐に仕舞う。

「領主の屋敷です」

老人は苦々しく答える。

「確か新しく代わった……………」

ザルマドで見たギルドの情報を思い出す。

「グラハム・ギュレイ。2ヶ月前、前領主が亡くなった後に選ばれた者です」

「どんな人物だ」

再び銀貨を三枚置くが老人は取らない。

「分かりませぬ。何も」

「何も？」

「グラハム・ギュレイなる者が領主に成り存在しているのは事実。しかしそれ以外の情報が掴めんです」

「……………また来る」

席を立ち外へ出ていった。

アールスは大通りを歩いている。
昼が近いせいか食べ物扱う店は賑わっている。

アールスがさつきまで話していたのはこの街の情報屋を統べる人物。
ギルドの情報は大まかなもの。対して先程の情報屋は事細かな情報をくれる。

料金や取引の内容は場所毎に違う。
最初のノックは暗号。二回ノックした後三回ノックする。そうしないと扉は開かない。
情報を聞くときは一つの内容により銀貨を一枚から三枚まで提示する。

情報屋はその値段に見合った情報を話す。老人が 銀貨を受け取らなかったのは値段に見合う情報が無いとき。

「グラハム・ギュレイ……」

アールスはシュベルツァ領主の名を呟く。

あの老人はその領主の事は名前以外分らないと言った。
それはかなり珍しい事。

本来、彼等情報屋が調べればその人物の素性は直ぐに分かる。相手が領主となれば依頼が無くとも調べる、地位の高い人物の情報は需要が多く高く売れる。

なのに分からないと、それは不自然と言って良い。

だがそれは同時に怪しいですと言っているようなもの。

何かが領主の屋敷に持ち込まれている情報と重なるとアールスとヴェルマーレの目的がその可能性は高い。

そんな事を思案しながらギルドへ向かう。

ギルドへ着きシュベルツァ滞在の報告をする。

3日以上その街に滞在するギルド登録者は報告の義務がある。緊急時の依頼や所在の確認の為である。

シュベルツァのギルドには食堂が内部で隣接しておりワザワザ外に出なくても食事が出来る。

アールスは適当に注文し早めの昼食をしていると男の怒声が食堂内に響く。

「黙って俺達と一緒に組めばいいんだよ!!」

そこには一人の少女が絡まれていた。

男達は5人。全員剣士風だが所々包帯を巻いている。

少女はリネアと同じ年頃に見え15〜6歳か。蒼い髪をツインテールにし水色のローブを着て背丈ほどある杖を背中に背負っている、先端に石らしき物が見える。恐らく『神滅石』だろう。

アールスは席を立ちさつさと退散する事にした。

少女は魔法を使うのだろう。魔法は貴重で有るためにどの冒険者も仲間にしたがる。あんな「私魔法使います」な格好をしていれば多少強引に勧誘されるのは目に見え、言わば自業自得。

それに暫くすればギルドの職員が上手く収める筈である。

が、思惑通り行かないのがアールスの日常。

「きやつー!!」

「おっと」

突き飛ばされた少女を咄嗟に受け止める。

「す、済みません」

受け止めただけとは言え異性に触られるのが慣れていないのか顔が赤らむ少女。その様子は小動物のように愛らしいのだがアールスは心の中で溜め息をする。

「んだあてめえ!!」

ゾロゾロと男達はアールスを囲む。

「巻き込まれただけなんだが……」

「うるせい!! 邪魔すんのか!？」

「素直にその女をこっちに渡しな!!」

アールスの言葉等聞こえないのかいきり立った男達は怒声を浴びせる。

(さてどうしたもんやら)

この連中を叩きのめすは簡単なのだがこれからする事を考えるとあまり目立ちたくない。かと言って少女を置いて逃げるのは流石に出来ない。

「待ちなさいあなた達!!」

アレコレと考えていた所に女性の声がする。

ギルド指定の制服を来た20代半ばの女性、中々の美人だがその顔は怒りで染まっていた。

「強引な勧誘は禁止されています！！もしそれ以上事を荒立てるならランク降格処分にしますよ！！」
かなりの迫力にその場は静まり返る。

「チッ」

舌打ちの後、男達は渋々といった感じで出て行く。

少女は安堵しホッと息を吐く。

「遅れて申し訳ありません。それとあなた」

ギルド職員に呼ばれビクツと体を震わせる少女。

「あなたも冒険者なら彼等のような人達位あしらえるようにならないといけませんよ」

「は、はい」

忠告にシヨンボリしながらも素直に頷く。

ギルド職員はそのまま持ち場に帰り食堂は何時もの様子になる。

「それじゃ気をつけてな」

アールスは適当な言葉を少女に掛け立ち去ろうとする。

グイッ。

が、裾を引っ張られ止まる。

恐る恐る振り向くと瞳に涙を溜めた少女がじっと見詰めている。

「お願いがあるんです！」

少女の方がアールスより頭一つ低い為、見上げる形になっている。

その姿は保護欲を掻き立てられ理性が逃げる事を許さない。

「私はラザリーと言います。どうかお願いを聞いて下さい!-!」
必死に懇願するラザリー。

「……………分かった。取り敢えず話を聞こう」
基本的にアールスはお人好しである。

本人は否定するが。

12話 冷静さ

「あの、これは一体何のつもりですか？」

「だってこうしないとアー君の所に行っちゃうでしょ」

今、ヴェルマーレとリネアは宿の部屋に居る。

ヴェルマーレがここまで引っ張ってきたのだがリネアはアールスを助けに行くと聞かないので……

「だからと言ってこれはないでしょう!!」

リネアは椅子に縄で縛り付けられていた。

妙に体つきを強調した縛り方だがそこはご愛嬌。

「取り敢えずアー君を待ちましょ」

カップにブランデーを八割入れ紅茶を一注ぎする。

「やっぱり紅茶にはブランデーよね」

「量が逆でしょう……って何ノンビリしてるんですか!？」

その様子に呆れるものの直ぐに我に帰りガタガタと暴れる。

「大丈夫だって。あの子は本当に強いから」

「でもいくら強くても不意を突かれたら!？」

実際リネアが傷を負ったのも不意を突かれたものだった。

「それはないわ」

リネアの不安をヴェルマーレはアッサリ否定する。

「アー君の一番強い所は冷静さだから」

「冷静さ？」

「そう。どんな状況でもね」

ヴェルマーレは初めてアールスと会った時を思い出す。

今にも死ぬという時に「助けて上げようか」と言うとアールスは断った。

人の命は儚く短い物。生に執着するのは当然と言える。

なのに断った。それは元々の性格のせいか育ちのせいかは分からないが物事を客観視している傾向がアールスにはある。

それが良いのか悪いのかは別にして、アールスは決して感情に任せて行動しない。

そして現在ヴェルマーレ以外に心を許していない。だからと言ってヴェルマーレを信用しているわけではなく、アールス曰わく「無駄だから」の一言。

それはともかく、実績実力共にトップクラスのアールス相手にどうにか出来る者はそうそう居ない。少なくともヴェルマーレが見たアールスの後を付けていった連中では尚更。

「さて、今度は貴女から話を聞きましょうか」

手をワキワキさせながらリネアに近付くヴェルマーレ。

「ちよっ！？何ですかその卑猥な手は！！」

「体に聞こうと思って」

まるで中年男のような厭らしい笑みを浮かべジリジリと詰め寄る。

「来ないで下さいこの変質者！！」

「いいわあ……その怯え方、ゾクゾクしてくる」

「ひいあああー!!」

アールスとラザリーはシュベルツァ近く森に居た。

ラザリーのお願いは依頼に付き合っただけで欲しいとの事だった。

その依頼はコウカツ草と言う薬草の採取でランクはH。駆け出しの冒険者がする依頼だ。

「良かったあー、本当助かりました!!」

上機嫌なのかラザリーの足取りは軽い。

「えー、まあ気にしないでくれ」

笑顔でいるつもりだが少々引きつっているのは仕方ないだろう。

本来ならシュベルツァ領主であるグラハムの調査をするつもりだったアールス。それがこんな事になってしまった。

だが順調にいけば日没前には終わる簡単な依頼なのが幸いでもある。

「初めてだったから不安でしょうがなかったんです」

「俺じゃなくても良かったろう」

嫌みではなく普通に疑問だった。

アールスは端から見て決して人当たりが良いように見えない。

「そんな事ないです！！確かに最初は女性の冒険者の方を探してましたが、見ず知らずの私を助けてくれたあなたなら信用出来ます！！」

「助けたと言うか巻き込まれたただけなんだが」

実際アールスは何もしていない。

ただラザリーにとってはいつの間にかアールスに助けられた事になっているようだ。

（何で俺が会う女性はこう自分勝手というか自己中心的というか……）

思い返すとそんな女性が多かった。勿論極めつけがヴェルマーレなのだが。

「あの、アールスさんはお一人で冒険者を？」

アールスの様子を窺うように聞いてくる。

「一応二人でな」

「女性………ですか？」

「ああ」

そう答えるとラザリーは気落ちしたように俯く。

「どうした？」

「あの……その方は恋人ですか？」

遠慮がちに聞くラザリーだがアールスは心底嫌そうに顔を歪める。

「あんなのは御免だ」

「そうなんですか？」

「女性は顔や体じゃない性格が大事だ」

ヴェルマーレと旅をし出して特にそう感じるアールスである。

「よかった…」

ポツリと呟いた言葉には聞こえていない振りをした。

「あ！ありました！！」

陽の当たる場所に目当てのコウカツ草を見つけたラザリーはせっせと採取する。

「それじゃあ帰るか」

コウカツ草の入った袋を満足そうに仕舞うラザリーにアールスは声を掛ける。

「せっかくだからオヤツにしませんか？」

「どこで？」

「はい！お菓子とお茶を持って来たので」

「……まあいいか」
この際多少時間が掛かっても変わらないし、こちら辺は森の入り口付近な為魔物はほぼ居ない。それにラザリーの笑みに逆らえそうになかった。

お菓子は焼き菓子上に果物が乗った凝った物で少々甘味が強いが苦味のあるお茶が口の中を流してくれる。

「その『神滅石』結構良いものだな」
ラザリーが背負っている杖に目をやる。先端にある山吹色に輝くそれは様々な『神滅石』を見てきたアールスからしても見事な物だった。

「母の形見なんです。母は若い頃冒険者として有名で小さい時から話を聞いてて将来私も冒険者になるのが夢だったんです」
ラザリーの表情は暗いものでは無く爽やかで決意に満ちたものだった。

「行くか」
フツと笑ったアールスは立ち上がり先に歩き出す

「待ってくださいーい!!」
片付け後を追うラザリー。
追いつき2人の影が重なり動きが止まる。

微動だにしない2人。しかし表情は対照的だった。
一人は無表情、もう一人は驚愕。

「何故分かった……」

その声を発したのはラザリー。
しかし先程までとは違い感情が籠もっていない。

「怖い怖い」

おどけるようにアールス。

ラザリーの右手にはナイフが握られておりアールスが手首を掴んで寸での所で止めていた。

「今の今まで気付かなかったさ、だがあんたがこっちに来るときに一瞬だが殺気を感じた」

それはほんの僅かな殺気。
普通ならば気付けない程、縦しんば気付いても反応までは出来ないだろう。

「まさか感づかれるなんてね」

今までの愛くるしかった表情が嘘のように冷たい笑みを浮かべる。

「見事な演技だったよ、でも生憎と俺はひねくれ者でな」
グツと手首を掴んでいる手に力を籠める。

「さて、何絡みかな？」

「風よ!!」

杖の『神滅石』が輝く。

「ちっ!？」

アールスはラザリーから跳ぶように離れる。

ズドン！！

凄まじい爆音が森に響く。

土と葉が宙に舞い収まるとさっきまでアールスが居た場所に直径二メートル程の穴がありラザリーの姿はなかった。

「随分と良い引き際だ」

アールスは感心して地面に落ちているナイフを拾う。
刃には何か液体が付着している。

「リネア絡みか……………な」

13話 面会

「いやあ、満喫したわ」

「うつつ…汚されました」

アールスが宿に戻ったのは夕刻前。

ヴェルマーレの部屋に入ったのだが其処には肌を艶々させたヴェルマーレに息も絶え絶えのリネアが床に突っ伏していた。

「…………それはそれとして」

取り敢えず深く考えるのを止める。追求した所で禄な事にしかならないからだ。

「これ見てくれるか？」

この状況に一切触れずヴェルマーレにナイフを見せる。ラザリーが落としていった物だ。

「刃に何か塗ってあるだろ？」

「どれどれ」

ヴェルマーレは刃に指を這わせ匂いを嗅ぐ。

「アールスさん襲われたりしませんでしたか!？」

復活したりネアが言うがアールスはそれを手で制する。

「ジガ草ね」

ヴェルマーレは断言する。

「やはりか。リネア、このナイフは今日俺を襲った奴が持ってた物だ」

「そんな!？」

絶句するリネア。

「話したら？私達はもう無関係じゃないわよ」

「……………はい」

リネアは重い口を開いた。

「私はグランベルトの出身です」

軽い夕食を取った後三人は宿の部屋に戻った。

「へえ、随分遠い所ね」

ヴェルマーレの言う通りグランベルトはここシュベルツァから西にあり馬車でも3ヶ月は掛かる。

「家は代々続く商家でそこそこ裕福でした」
口が渴いたのか水を一口含む。

「母は病気がちでしたが優しく、父はそんな母を大事にし妹は悪戯好きながら明るい性格で私は幸せでした」

「でも二年前のある日私が帰宅すると屋敷内は血で染まっていた」

リネアの顔色が青くなり震えだす。

「まず見つけたのはメイドの女性でした。いつもにこやかに挨拶してくれる彼女から血が流れて死んでいました。私は生きている人を探しました、でもみんな死んでいました。妹も母も………」

震えが止まる。

「呆然としていると父の書斎から物音が聞こえたんです。ひょっとしたら父は生きているかもと私は書斎の扉を開けました。確かに父は居ました、でも様子がおかしかったんです」

リネアは虚ろな瞳になる。

「父は全身血を浴び笑っていました。異様な光景に私は気を失い暫くし目を覚ますと既に父は居なくなっていたのです」

「それから私は父を探す為に旅に出ました。そして先日ギルドの情報で父の名を見つけました」

懐からクシャクシャになった紙を取り出し広げる。

「シュベルツァ領主グラハム・ギュレイ、父は婿養子でこの名は旧姓です」

「で、会いに行ったわけ？」

「はい、ですが門前払いされてどうしようかと悩んでいたらいきなり襲われて……それで今に至ります」

「会ってどうしたいんだ？」

「……事実が知りたいんです、あの日何が有ったのか」

「でもあなたは領主に会いに行つた直後に襲われ、多分その連中の仲間らしい人にアー君も襲われた。て事は………大体解るでしょ？」

ヴェルマーレの言葉にリネアは苦悶の表情を浮かべる。

「家族達を殺したのは親父さんでリネアを襲つたのは口封じか………」

リネアが気絶した時に運良く見つからなかったのだらうとアールスは付け足す。

「一つ聞きたいんだけど良い？」

リネアはコクンと頷く。

「その時以前に『神滅石』を購入しなかった？或いは預かったとか」

「ええ、商売で偶に扱っていましたが………」

「ふうん」

聞き何やら思案顔のヴェルマーレ。

「んじゃ会いに行きましょう」

「私の話聞いてましたか！？」

軽く言うヴェルマーレにリネアは思わず食つてかかる。

「私やアールスさんを襲つたのを指示したのは恐らく父です……！な

のに会いに行くなんて危険すぎます！！それ以前に会えませんか！？」

「大丈夫だって、私とアー君が守って上げるし会えないなら無理矢理何とかするし」

「無理矢理って！？そんな事したら捕まりますよ！！」

「諦める。ヴェルマーレがあ言い出したら止めれん」

アールスはリネアの肩にポンツと手を置き溜め息混じりに言う。
今までの付き合いから無理に止めると余計ややこしい事態になる。
ならさっさと済ませるに限る。

「でも……………」

「それに私達もあなたのお父さんに用事があるから」
言いよどむリネアにヴェルマーレはウインクで黙らせた。

14話 誤算

薄暗い室内を蠟燭の鈍い灯りが照らす。

男は窓から外を眺めている。

闇に包まれた風景の何処をみているのか。

「主様」

音も無く執事姿の老人が部屋に入る。老人とは言っても背筋は真っ直ぐに伸び姿勢が良い。ただ真っ白な髪と口髭が彼の年齢を表していた。

「以前仰っておられました方がいらっしゃいました」

「通してくれ、失礼のないようにな」

「はっ」

再び部屋に静寂が訪れる。

男はカーテンを閉め蠟燭を吹き消した。

「会いたかったよヴェルマーレ」

何故か暗闇の中で男の胸元が煌めいた。

「たのもー!!」

「あの、もう少し声を抑えて…」

シュベルツァ領主グラハム・ギュレイの屋敷は街のやや南西にある。

屋敷もかなりの規模だが敷地はその十倍以上はある。

「取り合ってくれないかと思ったんだがな」

相手の対応は予想外のものだった。

ヴェルマーレが門兵に名を告げると慌てて屋敷内へ報告に行ったのだ。

「俺達が来るのは予測積と言う事が、とすると不味くないか？」

「だとしても会ってから考えればいいわよ。まどろっこしいのは嫌いだから」

此方は予想出来た返事にアールスはやれやれと溜め息をする。

そんなやり取りをしていると門兵が息を切らせて戻って来た。

「お待ちせしました。此方へどうぞ」

鉄門が開き三人は中に入る。

門から屋敷までの距離を歩く。

「お二方は有名ですか？」

リネアが小声でアールスに聞く。

「まあ、そこそこな」

アールスとヴェルマーレの名はSランクの冒険者として有名である（どちらかと言えば悪名）。

ただ果たしてそれで中に入れたのか或いは別の何かなのか……..
アールスはリネアに簡単な返事をし辺りを警戒する。何せ此処はリネアや自分を問答無用で襲うよう指示した人物が主の屋敷なのである、畏の可能性は十二分にある。

「ここからは私が御案内します」

屋敷の前に到着すると白髪の執事が門兵に変わり三人を中へと誘う。

通路は殺風景なもので調度品等は一切ない。奥へ進むがランプが置かれていた間隔が広いのかあまり先が見えない。皆無言で進む。

執事は感情を全く出さずリネアは緊張からか落ち着きがない。

アールスは前に行くヴェルマーレの様子を伺う。

彼女の顔からは普段の軽薄な表情が消えていた。その様子は滅多に見れないものだがその原因にアールスはおおよその予想は付いていた。

「リネア、何があってもヴェルマーレより前に出るな」

「え？」

「此方で御座います」

リネアの疑問の声を遮るように執事が到着の旨を伝える。扉を執事が開き室内へと三人を招き入れる。

室内は通路よりは明るく全体を見渡せる。中央にテーブルを挟むようにソファ二つ。所々壺や絵画等があるが高級感は無く地味な部屋と言える。

「ようこそいらつしゃいました」

三人を出迎えた黒髪で40歳位の男。

一見すると温和そうな顔立ち、目は細く瞳は殆ど見えないが異様な程鋭い。藍色のローブに身を包んでいる。

「お父様!？」

「待ちなさい」

思わず男に駆け寄ろうとするリネアを止めるヴェルマーレ。

「ようこそいらつしゃいました、私がシュベルツァ領主グラハム・ギユレイです。お久しぶりですねヴェルマーレ殿」

「……………そうね」

歓迎振りを示すグラハムに対し苦々しく言うだけのヴェルマーレ。

「そう言えば済まなかったねリネア、部下が勝手にとんでもない事をしてしまって」

「お父様が指示したのではないんですか？」

「当たり前じゃないか、何処の世界に娘を襲わせる親が居るものか」

グラハムの表情は父親が娘を想うそれだった。

リネアは希望が見えた気がした。今のグラハムは以前の優しい父親だ。

あの時の光景は自分の見間違いではないのかと。

「お父様!!あの時屋敷で何が有ったのですか!？」

「あの時？ああ私が家族や使用人達を殺したあれかね」

「…………え？」

「妻は病弱でお金が掛かってしょうがなかった、お前の妹は五月蠅く目障りだった。使用人達はついだ」

「え…………あ…………」

何でもないように言うグラハムに意味が理解出来ないリネア。
一歩二歩とよるめきアールスが後ろで支える。体は小刻みに震えまともに立って居られない。

「子供はどうしたの？」

グラハムを睨みつけながら聞くヴェルマーレ。

「やはり子供良いねえ大分戻ったよ。しかしやはり一番は君たちだよヴェルマーレ」

グラハムは愉快に笑う。その姿は異様で不気味。

「さてどうするかね、食事でもして行くかい？」

「いえ、帰らせて貰うわ！！」

ヴェルマーレはグラハムに粒のような物を投げつける。それが芽を生やし急激に成長しグラハムの体にまわりつき拘束する。

「ぐぬ…………」

全く動けなくなったグラハム。

「アー君！！」

「解ってる!!」

ガシャーン!!

素早く移動していたアールスが窓を蹴り割る。

「行くぞ!!」

「え、きゃあ!？」

付いていけないリネアをアールスが抱え窓から外へ跳び出る。

「待つてなさい、直ぐ滅ぼしに戻るわ」

そう言い残しヴェルマーレも窓から出て行く。

「主様如何なさいますか？」

「放っておけ。また来る」

グラハムを拘束していた植物が腐り零れ落ちる。

「なあヴェルマーレ」

三人は一目散に屋敷を出、宿に戻っていた。

「誤算だったわあれだけの力を戻してるなんて」

「道理でアツサリ会うわけだ」

ヴェルマーレとアールスは疲れた様子で椅子に座る。

「お父様は一体……」

リネアは分けが解らないのか啞然と呟く。

「あなたのお父さんはもうあなたの知ってるお父さんじゃないわ」

「では……」

「あれは『神滅』私達神の天敵」

15話 旅の目的

「え？神滅？え？……」

唐突に出た言葉を理解出来ないリネア。

「ちゃんと最初から説明した方がいいんじゃないのか」

「それもそうか。それじゃ改めて自己紹介」

コホンと一つ咳払い。

「私はヴェルマーレ、あなた達が女神とか慈愛とか言うそれ」

「は？」

キョトンとするリネア。

「本人て意味ですか？」

「そう」

「よくも……」

「ん？」

何やらブルブル震えだすリネア。

「よくもこんな状況でそんなくだらなない冗談が言えますね！」「
ヴェルマーレの胸ぐらを掴みガクガクと揺らす。

「あなたがヴェルマーレ様！？ふざけるのも大概にして下さい！！」

あの方はあなたのような酒飲みでも変質者でもありません!」

「ちょい!?! ちよつと!?!」

「日頃の行いは大事だな」

しみじみ言うアールス。

「大体……!?!」

まだヴェルマーレへの抗議を続けようとしていたリネアの動きが止まる。

「何これ!?!」

リネアは自分の身体を見る。

何処から生えているのか薦が体に巻き付き動きを止めていた。

「うっぷ……気持ちわる。落ち着きなさいっていくら私でも場はわかまえるわよ」

パチンツと指を鳴らすと薦はリネアを解放する。

「今のはさっきの!?!それに初めて会った時も……」

と、以前助けられた時を思い出す。

盗賊達の動きを止めた時と酷似していた。

「魔法……でもそんな様子はなかった、じゃあ何?それこそ人の出来る事じゃ……」

「ヴェルマーレは世間じゃ慈愛と言われてるが本来は大地の神様だからな、植物を自在に操る事ぐらいは訳ないって事だ」

この世界は神々が造り出したと言われている。海や山、在るいわ空等全て。

ヴェルマーレは『女神の詩』が余りにも有名過ぎる為に『大地』の神である事は意外に知る物は少ない。

「因みに使ってるのはこれ、ハヅカ草」

ピンツと黒い物、種を弾く。床に転がると直ぐに芽が出てあつと言う間に人の背丈程に成長した。

「丈夫な蔦だから便利なのよね」

目の前でヴェルマーレがやった事にリネアは信じられない心境だった。

植物を通常より早く成長させる魔法は聞いた事があるリネア。がこの早さは異常。その上、魔法は『神滅石』を使って行使する。その為に多少のタイムラグがあるのだがそれがヴェルマーレには無い、とても人が出来る芸当とは思えない。

「じゃあ本当にあなたが……」

「そうそう」

「そんな……あなたがヴェルマーレ様なんて……」

軽く肯定するヴェルマーレにリネアはガックリとうなだれ床に手を付ける。

「あら、この反応最近見た記憶が？」

「現実とは厳しいもんだ」やれやれと嘆息するアールス。

「ま、信じる信じないはこの際どうでもよくて」

「いいんですか!？」

「そう。時間もないしね」

ヴェルマーレはワインをグラスに注ぎクイツと飲み干す。

「私が『神滅』を追ってこの世界に来た。其処までいいいわね」
コクリと頷くりネア

まだ完全に信じたわけではないが取り敢えず話を聞く事にした。

「『神滅石』は『神滅』が入り込んだ物。長い年月の間に『神滅』の自我は消え魔法を行使する道具として使われるようになった。でも……」

一回区切り、

「稀に『神滅』の自我が残ってる場合がある。それを見つけ出して消滅させるのが私達の目的」

そう、だからヴェルマーレとアールスは旅をする。その為ギルドのランクをわざわざSで止めている。SSSまでになると国専属、つまりお抱えになると自由がきかなくなってしまうからだ。

「『神滅石』の『神滅』の自我は所有する人間を乗っ取る。そしてまずする事は自分の力を戻す事、その手段は子供を喰らう」

「子供を喰らう!？」

その言葉に真っ青になるリネア。

「喰らうと言っても実際に食べるわけじゃなくて、子供の恐怖に染まった精神を喰らうの。大人と違って子供の精神は純粹、その恐怖に染まった純粹な精神を『神滅』が喰らう事で力を取り戻して行く」

精神を喰われた子供は死にはしないものの一生呼吸するだけの『物』になる。

「だから俺達は子供が大量に居なくなっている街を探しているんだ。常に後手なのが悔しいが」

顔を歪めるアールス。

勿論そうなる前に何とかしたい、しかし前兆が無い為困難なのだ。

「力を取り戻した『神滅』がする事は自分以外の存在の消滅。『神滅』は自分以外の存在を認めないから」

「そして野放しにしておくと言った力を戻して手が付けられなくなる」

「ではお父様は……」

リネアは縋るようにヴェルマーレを見つめる。

「あなたのお父さんは『神滅』に支配されてる。家族を殺したのもそのせいね」

ヴェルマーレはその視線から目を逸らさず答える。

「そんな……どうすればお父様は元に戻るんですか！？あるんですよね方法が！？」

「無理よ」

僅かな希望を込めたりネアの言葉を一言で否定する。

「一度『神滅』に支配された者はもう二度と元に戻らない」

「そ……そんな……」

「そして私達はこれから直ぐにあれを消滅させに行く」
スツと椅子から立ち上がるヴェルマーレとアールス。

「消滅させるのは『神滅』だけどあなたのお父さんを助ける事は出来ない。いえ助ける所か殺す事になる」

「え…？」

「『神滅』を消滅させるには元々『神滅』が居た『神滅石』を破壊しなくちゃいけない。でも『神滅石』はその者の心の臓に同化する」
つまり『神滅』を消滅させるには心臓を破壊しなくてはならないと言っこと。

「そんな……なら！？なら私も連れて行って下さい！！」

「駄目」

「！？」

「正直あれは強いわ。あなたを庇いながら戦えない」
リネアを想ってか優しい口調、しかし有無を言わさない意思のある言葉。

「恨むのなら恨んで。元は私達がこの世界に『神滅』を追い出したのが原因なのだから」

「恨むなんて……」

リネアは自分の服を握りしめる。

確かにヴェルマーレの言うとおりかもしれない、しかしヴェルマーレはこれから命懸けで『神滅』と戦う、いや戦ってきた。遙か昔にこの地に降り戦ってきた。そんなヴェルマーレを恨むなんて事はリネアに出来なかった。

「行くわね」

そう言い残しヴェルマーレとアールスは部屋を出て行く。

シンとなった暗闇の中で暫くした後リネアはユラリと立ち上がる。

「私は……………」

リネアも部屋を出て行った。

16話 神滅の罭

闇夜の街をリネアは走る。

正直自分が行っても何の役にも立たない事はリネアも十二分に分かっている。しかしただ何もせず事が終わるのを待っているのは我慢出来なかった。

突然現れた人影に足を止める。

「あなたは！？」

リネアに緊張が走る。

その人影を月明かりが照らす。

蒼い髪に水色のローブを着た少女。

昼間アールスを襲ったラザリー。

そしてリネアも彼女に会っていた。リネアに傷を負わせたのはラザリーだった。

「何の用ですか？」

リネアは冷静に聞くが心中はパニック状態にあった。

戦って勝てる相手ではない、だからと言って逃げてはヴェルマーレに逆らって此処まで来た意味がない。

「付いてきなさい」

「……？」

リネアはラザリーの言葉を理解出来ず首を捻る。

そんなリネアに構わずラザリーは背中を向け走り出す。

「ああもう！！」

どうしていいか分からなかったリネアだがラザリーの後に続く事にした。

暫く走っていると、どうやらグラハムの屋敷に向かっているのだと判断する。

「一体何のつもりなんですか!！」

息が多少上がる中、今出せる声を目一杯出す。

「依頼」

対してラザリーは一言で済ませる。

「誰からですか!！」

「言えない。スピード上げる」

ラザリーの走る速度がグンッと上がる。

「ひいー!！」

ラザリーの背中を見失わないように必死にリネアは続いた。

屋敷を再び訪れたヴェルマーレとアールスはグラハムが居た部屋を目指していた。

屋敷内に人気はなく不気味な静けさが支配していた。

「不意を突きたいがな」

アールスは剣を手に慎重に進む。

「…………無理ね。感づかれてる」

ヴェルマーレに何時のにも軽薄さはない。

「因みに奴位の強さの『神滅』は何時振りだ」

「そうね…………500年振りかな」

「そうか…………」

アールスがヴェルマーレと共に『神滅』を消滅させるのを手伝い始めたのは3年程前から。決してこの3年の間に戦ってきた『神滅』は弱くなかった、何度も死ぬ思いをして来た。今回はそれらを越える強さだと言う。

（流石に今回は死ぬかな…………）

そう思うが死ぬつもりはなかった。確かにヴェルマーレに会った時は死ぬ事を一度は受け入れたがアールスは死にたがりではない。あの時は出来る限りやった結果だったので死を受け入れただけだった。人は何時か死ぬ、違うのは今か先かだけと言う考えは今も変わらない。

（せいぜい足掻いてやるさ）

ここであれを滅ぼす事が出来なかったら世界が滅ぶのは時間の問題となる。しかしアールスに世界を救うと言う使命感はない。あるのは今その立場にいるのが自分だというだけだった。

二人は中庭に入る。

グラムが居た部屋は中庭に面しており此処から様子を窺おうとしたのだ。

「お待ちしてましたよ」

しかしそんな二人の思惑を無視する声が。
待ち構えていたようにグラムが中庭で出迎えた。

「わざわざのお出迎え恐縮」

「なんの、あなた達は大事な客人ですからな」

あくまで余裕なグラムを余所にヴェルマーレは目配せしアールスは頷く。

「場所は此処でいいの？何なら屋内に移りましょうか」

「構いませんよ。此処の方が貴女の力は使いやすいでしょう？」

ヴェルマーレは草や木等の植物を操る。なので屋敷内より中庭の方が戦い易いのは明白。だからこそこのグラムの態度にヴェルマーレは苛つく。既にヴェルマーレの力を上回っているのか、或いは何か思惑があるのか。

しかしヴェルマーレ達に考え込む時間は無い。

「じゃあ遠慮なくやらして貰うわ!!」

芝生が鋭い刃になり四方からグラムに襲い掛かる。

「ほう…」

グラムは右手を軽く振る。

芝生の刃はグラムに触れる前に腐り粉になる。

「はあっ!!」

そんな事は予測積みのヴェルマーレは蹴りを放つ。

「貴女から来てくれるとは嬉しいですね」

「くっ!？」

難なく蹴りを受け止めたグラハムから黒い霧のような物が湧き出、大蛇の形となる。

「では頂きますか」

その先端が裂け、口のように開けヴェルマーレに食らいつつする。

「分かってますよ」

グラハムは後ろを振り向く。

そこには背後から剣を突き刺そうとしているアールスが居た。

ガギッ!!

グラハムの背中にまた黒い霧の大蛇が現れアールスの剣を防いだ。

「チィッ」

アールスはそのままグラハムの前に回りヴェルマーレを掴んでいる腕を蹴り上げる。

解放されたヴェルマーレとアールスはグラハムから距離をとる。

「まだまだ!!」

再び突進するヴェルマーレにグラハムの背後に回るアールス。

ヴェルマーレ達にすれば如何にグラハムから隙を作りアールスが心臓を狙えるかに懸かっている。

草や大木が凶器となりグラハムに襲い掛かり、ヴェルマーレ自身も攻撃をする。アールスは隙を見てグラハムの心臓を常に狙う。攻防は三十分を越えた。

既に中庭は見るも無惨な状態になりヴェルマーレとアールスの表情には疲労の色が浮かんでいる。しかしグラハムだけは変わらず同じ位置に佇んでいた。

「随分お疲れの様ですね」

「全然、まだ若いから大丈夫よ」

（これは本気で拙いな）

アールスは冷静に状況を見る。

明らかにヴェルマーレの力は弱まっており、その上活路を見いだせないでいる。

状況は最悪。

逃げる事も想定しなくてはならない。

（そう言えば奴は動いてない？）

荒れ果てている中庭だがグラハムの辺りだけは綺麗なままなの状態に不思議に思う。

（動かなくても俺達の相手が出来る余裕からか？其れにしたって…

……………まさか！？）

ある考えに至ってアールスの背筋が凍る。

「ヴェルマーレ！！」

「ん？何……………な！？」

ヴェルマーレは自分の足元を見て驚愕する。

黒い紐のような物がヴェルマーレの足に絡みつき動けなくなってい

た。

「食虫植物をご存知ですか？おっとヴェルマーレ様に聞くのは愚問ですな」

「くっ！？」

ヴェルマーレは足元の紐を解こうとするがビクともしない。

「獲物が罾に掛かるのをひたすら待つ。難儀なものです」
グラハムは淡々と話す。

「しかし掛かってくれれば後は簡単です」
ヴェルマーレの周囲が盛り上がり地面から黒い円形の物が現れる。

「獲物を捉え吸収するだけです」
その円形の物がヴェルマーレを包み込もうとする。

「させるか！！」

「貴方は大人しくして頂けますか」
助けに走るアールスの前に無数の黒い蛇が立ちふさがる。

「くそお！！」

必死に剣を振るい前に進もうとするが後から後から数が増え対処するので精一杯。

「ふう、これまでか」

ヴェルマーレは溜め息をし、座り込む。

「諦めますか？」

「ええ、私の負け。サッサとやんなさい」
サバサバと言い放つ。

どうかなるならヴェルマーレも何とかしようとする。
しかし体力は消耗し身動きは取れない。あの黒い円形に閉じ込められれば魔力という栄養を吸収されヴェルマーレは消滅するだろう。
状況は既にチェックメイトとヴェルマーレは判断したのだ。

「御免ねアー君、約束守れなくて」

「馬鹿やろう！！諦めるな！！」
そう言うものの、一向に黒い蛇は減らず助けに行けない。
自らの力不足に唇を噛む。

「流石潔いですな。では遠慮なく」
徐々にヴェルマーレを覆う黒い物。
ヴェルマーレただ目を瞑りジッとしている。

「止めるー！！」
絶叫するアールス。

遂にヴェルマーレを覆う……………が、
それはシャボン玉のように弾け消える。

「え……………」
分けが解らずキョロキョロするヴェルマーレ。

「消えた？」
アールスを襲っていた無数の黒い蛇も霧のように霧散した。

ヴェルマーレとアールスはグラハムを見る。

グラハムは両手を空に向けたまま動かず、そして胸からは剣の刃が突き出ていた。

グラハムはゆっくりと後ろを振り向く。

「そうかお前か」

其処には震えながら、しかししっかりと剣を握り締めるリネアがいた。

17話 娘の想い父の後悔

まるで金縛りにあったように誰も動かなかった。

グラリとグラハムの身体は地面に倒れ込む。

「お父様………ごめんなさいお父様ー!!」
リネアはグラハムに顔を付け泣き出す。

「リネア………貴女何でここに………」
ヴェルマーレはフラリと立ち上がりリネアの側までくる。

「リネア………」
アールスもまたリネアに近づく。

「謝るではないリネア」
掠れるような声を出したのはグラハムだった。

「お父様ー!!」
リネアは顔を上げる。

「ヴェルマーレ……様、ご面倒をお掛けし………て申し訳ありません」

「私にはいいから娘さんに」
心臓をリネアが貫いた為グラハムを支配していた『神滅』は滅んだ。
しかしグラハムの命も後僅かなのは目に見えて明らか、ヴェルマーレは自分の娘と話すようにと譲った。

「リ……ネア、よくやった。……お前は世界を……救ったのだ」

「お父様、私は……!」

どんな理由であれ自分の父を殺したのには変わらない。そんな罪悪感がリネアの心にのしかかる。

しかしグラハムは優しい笑顔を浮かべリネアの頭に手を乗せる。

「あ………」

「リネア……私は嬉しい……我が娘に止めて貰えたの……だ。それにお前が気に病む事……はない。元々私の自業自得、あの時……ある商人から珍しい『神滅石』を買ったのだ。……それは神秘的な物で眺めるのが……楽しみになっていた。……が、ある時自分の心の中の……黒い何かが溢れて来るのを……感じ、気づいた時には皆殺していた……」

グラハムは今にも途切れそうになりながらも懸命に言葉を繋げる。

「その時……リネアを見つけ……私は必死に抵抗し……屋敷を出た」
そう、だからリネアは助かったのだ。

「私は……多くの命を……奪った……だから……こうなるのは当然……だ」

グラハムは泣くリネアの頬に手を当てる。

「笑いなさい……リネア。笑って……生きていっておくれ……」

「リネア、笑ってあげなさい」ヴェルマーレの言葉にリネアは涙でぐしょぐしょになった顔を笑顔にする。

「分かりましたお父様、私は一生懸命生きていきます。ですから御

安心下さい」

「ふふ……やはりお前には笑顔がよく……似合……う……」
目が閉じそして動かなくなるグラハム。

「お父様……」

リネアはもう泣かずグラハムの手を愛おしく握りしめた。

その後。

後始末が大変かと思われた。

何せ屋敷の中庭は全壊状態。更に現領主グラハム・キュレイの死と一晩で起こったからだ。

しかしグラハムの執事をしていた男がすべて手回しをしていた。今回の騒動は盗賊団が屋敷を襲った事になった。公式に発表された内容は真夜中、盗賊団が屋敷に潜入。それに気づいた領主グラハムは魔法で撃退を計り中庭で戦闘、しかし善戦のかいなくグラハムは殺害。

かなり無理がある内容だが本当の事よりはまだ信じられる内容と言える。

執事曰わく、前々から言われていたとの事。

「ラザリーが？」

「はい、あの場所まで案内されました」

あの夜から三日後、アールズとヴェルマーレは乗り合い馬車に乗るリネアを見送りに来ていた。

三日間何かと忙しかった為（ヴェルマーレ以外）気になっていた事が話せずようやく今聞けていた。

「何でも依頼だとかで。でも屋敷に着くと居なくなっていました」

「となるとグラハムが？何でか分かるかヴェルマーレ」

話を振られたヴェルマーレは持っていたジュースを一気に飲む。

「彼自身が言ってたでしょう？リネアに止めて貰えて嬉しかったって」

「しかし」

「そう、しかし本来『神滅』に支配されると自我は無くなる。でも彼は抵抗した、微かに残る理性で執事やらラザリーって子に頼んだんでしょう。せめて最期は娘にと」

そう言うヴェルマーレだが内心かなり驚いていた。

『神滅』に支配された人間の理性が残っている事は今までなかった。

何が其処までさせたのか。

娘への想いか或いは後悔か……

「それでリネアは此からどうするの？」

「取りあえず故郷に帰って墓前に今回の事を報告します。後は暫くノンビリします」

「そう………」

ヴェルマーレはそっとリネアを抱き締める。

「ヴェルマーレさん………」

リネアは素直に顔をヴェルマーレの胸に埋める。
それはまるで母のように暖かい。

出発の時間になりリネアが乗り込んだ馬車がゆっくり動き出す。

「ありがとうございました！！さようなら！！」
馬車から身乗り出し手を振るリネア。

「違うわよりネア！！『さようなら』じゃなくて………」

「またね！！」

「リネア！！またな！！」

「あ………はい！！また！！」

リネアは見えなくなるまで手を降り続けた。

「やれやれ行っちゃったわね」

「寂しそうだな」

「まあね、でもまた会えるし」

「勘か？」

「ううん、確信」

「なる程ね。で、これからどうする？」

「勿論ラザツシュの果実酒を呑みに行く!!」

「よく覚えてたなあ」

「さあ行くわよ!!」

「はいはい」

17話 娘の想い父の後悔（後書き）

どうも吉田 匠です。

こんな駄文に付き合って貰い恐縮です。

ようやく一区切り出来ました。

読み返すと書きたい事が書けてないなあ。

難しいです……

まだまだこの小説は続きますのでよろしくお願いします。

ではこれで。

昔話 王のワイン

「かぁー、うんまい!!」

とある街のとある酒場。

陽は暮れ、一日の疲れを癒やそうと酒を酌み交わしている。

「何と言うか見事な呑みっぷりだな」

「んふふ、惚れ直した？」

「直さん。それ以前に惚れてない」

アールスとヴェルマーレの二人は酒場で呑んでいた。

実は二人で呑むのは久し振りの事だ。

以前はアールスも付き合っていたのだがヴェルマーレの酒癖の悪さにここ最近は避けていた。

今回は偶にはいいかと一緒に呑む事にしたのだが……

「気分良いわぁ。ほらぁ、チビチビやってないでえ」

「まとわりつくな!!鬱陶しい!!」

既に後悔しているアールスだった。

雲一つ無い闇の空に見事な満月がある。
酒場も閉まった真夜中にアールスとヴェルマーレは帰路に着いていた。

「おゝ月さんが綺麗だなあゝ」

「自分で歩けコラッ!!」

すっかり酔っ払ったヴェルマーレは一人で歩けずアールスに肩を貸して貰っているのだが大人しくする訳がなく、暴れる為にフラフラしている。

「うわぁ!?!」

そんな事していると案の定二人して転んでしまふ。

「あ痛たたた……」

「んふふ」

痛がるアールスを余所にヴェルマーレは大の字になり未だご機嫌。

「そう言えばこんな満月を見てると思い出すなあ」

「数十年前」

グラスに波打つ液体を一口含む。芳醇な香りが広がり心地良い。

「若いが良いワインだ」

初老の男は満足げに呟く。

彼はある王国の王。名はザッハ・ウィルナ・クレベール。

善王として内外に絶大な人気を誇り自国を世界有数の王国へと造り上げた。

それほどの王となれば日常は責務で忙しく、この誰もが寝静まった夜に酒を呑むのが唯一の楽しみだった。

今日は満月。

最高の酒のつまみだ。

「こんばんわ」

カーテンが風に揺れるとそこに女性が居た。

絶世の美女とも言える容姿の彼女はザッハの向かいの椅子に座る。

「あなたは何時も突然ですな」

「美味しそうな香りに誘われただけよ」

「呑みますかな？」

「勿論」

ザッハはグラスをもう一つ取り出しワインを注ぐ。

「乾杯」

グラスを合わせ呑み合う。

「んゝ美味しい」

「でしょう?」

暫く二人は無言でワインを味わう。旨い酒に言葉は無用だとか。

「悩み?」

ザッハはグラスを置く。

「分かりますかな?」

「いつから貴方の事知ってると思ってるの?」

「そうでしたな……」

思わずザッハは苦笑いをする。

ザッハには頭が上がない人物が二人いる。一人は王妃であり今は亡き妻、もう一人は目の前の彼女。

ザッハは元冒険者である。彼女と初めて会ったのは駆け出しの頃、彼女に何故か気に入られ様々な手解きを受けた。

それから数十年色々な事があり王となったが彼女からすればザッハはあの頃のままであり幾ら年を取ろうと鼻たれ小僧なのだ。

「息子なのですが」

ザッハにはグリムと言う息子がいる。父であるザッハから屈強な身体と王妃である母から端正な容姿を受け継いだ第一王位継承者。

「親である私が言うのは何ですが出来た息子なのです」

グリムは剣士としての腕も確かでこの王国で適う相手は極少数、その上政もこなす。

王位継承者として文句の付け所がない。

なのだがザッハは溜め息を吐く。

「しかし今のままでは王位は譲れんです」

「ふ〜ん…………なる程ねえ。王様の真意に気付いてないってわけね」

「ええ」

皆まで言わなくとも彼女にはザッハの言わんとする事が解る。

（これだからこの方には適わない）

「あ、そうだ」

「何か思いつきましたかな？」

「じついつのはどう？」

「父上呼ばれましたか」

ザッハの私室を訪れた青年。

母譲りの金髪に美しい顔立ち。ゆったりとした服の上からも解る程鍛え上げられた筋肉。

彼がグリム・ウィルナ・クレベールである。

「ああ、頼みがあるのだが」

「頼みですか？」

「私が酒を好んでいるのは知っているな」

「はい」

ザッハの酒好きは王国内で知らない者は居ない。

貴金属や美術品には興味がなく妾の一人も居ない。そんなザッハの唯一の趣味が酒である。

収集は勿論自分の好みの酒を数種類造らせているほどだ。

「お前にある酒を探して来て欲しいのだ」

「私にですか？」

内心何故そんな事を自分にと首を捻るグリム。

「うむ。『王のワイン』を探してくれ」

「！？」

グリムはその言葉とザッハの眼差しにハッとする。

これは只の頼み事ではない。

自分は次期王として試されているのだと悟る。酒を探す事が王とどんな関係があるのかは分からない。しかしグリムには父であり王であるザッハは戯れにこんな頼み事をするとは到底思えなかった。

「……一週間下さい。必ずお目に適う代物をご用意致します」
グリムはそう言い残し部屋を後にした。

一週間後。

再びザッハの私室を訪れたグリムの手には一本の瓶がある。

「父上、お持ちしました」

「うむ」

ザッハはそれを受け取り三つのグラスに注ぐ。

「父上？何故グラスが三つあるのですか」

「居られるのでしょうか？」

ザッハは窓の方に声を掛ける。

「また来ちゃった」

「何奴！？」

グリムはザッハの前に立ち塞がり剣を構える。

「はいはい、そんな物は邪魔邪魔」グリムの剣をヒョイと簡単に
取り上げ放り投げてしまう。

「な！？」

目を疑うグリム。

余りのことにただ啞然とする。

「グリムよ、このお方は私の友人だ。だから心配ない」

「しかし父上!!」

納得出来ず声を荒げてしまうグリム。

それも当然で王の私室に見知らぬ人物が居れば警戒するのが当たり前。

「いいからいいから」

「貴様!!」

「よさぬかグリム!!」

彼女へ掴み掛かろうとしたグリムをザッハが一喝する。

「このお方に危害を加えようするなら例えお前でも許さんぞ!!」

「……………申し訳ありません」渋々といった様子で納めるグリム。

「分かればよい。それより持ってきたのだな？」

「こちらに」

差し出された瓶を受け取るザッハ。

「北のグルマリアから取り寄せました」

「ほう……………」

その言葉に感心するザッハ。

グルマリアはザッハの国とは友好な関係ではない。そのため両国は現在断絶状態にある。

そんな国からワインとは言え仕入れるのはかなり難しいと言える。

「では頂るか」

コルクを開けグラスに注ぐ。勿論二つ。

二人口に含みじつくりと味わう。

「……………旨い」

「……………うん凄く美味しい」

暫くの静寂の後二人はポツリと呟く。

「深みがある、それもただ深いだけではなく甘味と渋みが絶妙のバランスだ」

「まさに『ワインの王』ね」

二人の絶賛にグリムは湧き上がる歓喜を何とか抑えた。

グリムにとって父であるザッハは尊敬し憧れの存在であり越えなくてはならない壁。

その父の期待に応える事が出来た。

「でもこれは『王のワイン』じゃないわ」

「な！？どういう事ですか！！」

しかし突如として言い放った彼女の言葉。

「確かにな」

「父上まで！？」

続くザッハに愕然とする。

グリムには確固たる自信があった。

このワインはかなりの高額だ。しかし値段だけで選んだわけではな

い。実際に何百の候補のワインを試飲し自分の味覚で選んだ。

「何故です！？訳を教えてください！！」

最初二人は絶賛した。それなのに何故そんな事を言うのか？ グリムには解らなかった。

「これを飲んでみる」

ザッハは別のワインを出しグラスに注ぎグリムに渡す。

それを受け取り飲む。

不味くはない、しかしそれ程でもない。

「次はこれを食べてからお前のワインとこのワインを飲み比べてみよう」

ザッハが出したのは自国でよく食べられている料理。

グリムはそれを一口食べ自分が持ってきたワインを飲む。その後また料理を一口食べ次にザッハの出したワインを飲む。

「え……………」

グリムは思わず絶句した。

明らかに自分のワインよりザッハのワインの方が美味しい。

「グリムよ、お前の持って来たワインは確かに素晴らしい。しかし『王のワイン』ではない」

「貴方の持って来たワインは料理の味を消してしまう。でもザッハのワインは料理を食べる事で美味さが格段に増す」

「そんな……………」

グリムはガックリと床に膝をつける。

「私はお前に王位を譲る」

「え!？」

茫然とするグリムを余所にザッハは突然言い放つ。

「お前は優秀だ、それこそ私よりな。しかし王は一人で出来る物ではない。このワインのように周りに引き立てられる事により一層王は輝く。グリムよ、良い王になれ」

「……………はい」

「話し終わった?さ、飲も飲も」

三人だけの新しき王の誕生を祝う宴は朝まで続いた。

「って事があってね」

「下らん」

「何よお」

「それは単にお前が旨いワインを飲みたかっただけだろ」

「……………ピンポーン」

「ほらさっさと立て」

二人はフラフラとしながら宿に戻って行った。

18話 ドラゴン討伐

「あ、お久しぶりですアールスさん」

「やあクエス、情報を貰えるか」

朝、アールスはザルマドのギルドを訪れていた。

「ヴェルマーレさんは？」

銀貨を受け取り情報の書かれた紙を渡す。

「おねんね中だ」

ヴェルマーレは昨夜やけにご機嫌で飲みまくり現在爆睡中だ。

「相変わらずですねえ。暫くザルマドに滞在するんですか？」

「ああ、今のところな」

「よかったあ、今『神滅石』が不足してるんですよ。また持ってきて下さい」

「考えとくよ」

そう言い椅子に腰掛ける。

「変わった事はないか」

情報を眺めフウツと息を吐く。

あの一件から2ヶ月経ちザルマドにアールスとヴェルマーレは戻って来ていた。

「まあそうそう面倒事なんて起きんだろ」

情報を仕舞い壁に付けられている依頼書を適当に見て回る。
倉庫の整理、家の修繕から護衛や魔物退治まで多種多様の依頼がある。

（偶には請けてみるか）

ヴェルマーレの様子から今日はまず起きないだろうと推測する。その上『神滅』に関する情報は今の所ない。
つまり暇。

なら暇つぶしに依頼を請けるのもいいかと思う。

（どれにするかな…）

思案顔で依頼書を見る。依頼を請けずに『神滅石』を採掘してきてもいいが、ヴェルマーレでないと判別出来ない。

「これにするか」

依頼書を壁から引きちぎる。

内容はザルマドの西の山中に生息するグレイグドラゴンの討伐。
グレイグドラゴンとは全長十メートルを越す上位竜種。全身黄土色の固い鱗で覆われており村の一つは軽く壊滅するほどの強さ。

ランクはA。ただし複数人必須。

単独の場合はSランク以上が条件で報酬は金貨3枚。

アールスのランクはSだが、実質上は最高ランクのSSSな為問題ない。

「待ちたまえ」

受付に足を運ぼうとしたアールス呼び止める声。
振り向くと其処には鎧姿の青年がいた。全身を銀に輝く鎧に身を包み腰には装飾の入った剣を差す。サラサラの金髪が似合う二枚目だがどこか軽薄な雰囲気がある。

「何か？」

「その依頼を僕に譲って欲しいんだ。君では無理だろうからね」
如何にも馬鹿にしたような口調。

普通の冒険者なら即喧嘩だろう、しかしアールスは常日頃あれと一緒に居る。

そのためかさほど気にならなかった。

「ああ構わんよ」

依頼書をその青年に渡そうとした瞬間、

「ごばあ！？」

その青年が吹き飛んだ。

「は？」

流石のアールスもポカンとしていると女性が前に出てくる。

「申し訳ありません、家の腐れ坊ちゃまが失礼を致しまして」アールスに頭を下げるこの女性。

燃えるような長く赤い髪を一本のおさげにしており背はアールスより少し低い、美人だが冷たい印象を受ける。何より目を引くのは彼女の服装、所謂メイド姿。こんな場所より貴族の屋敷の方が釣り合う。

「ほら坊ちゃまも謝って下さい」

いつの間にか彼女は吹き飛ばされた青年の首根っこを掴み、アールスの前に引きずり出していた。

「チエルリー！！いきなり殴るとは何だ！？」

青年は殴られた右頬を抑えている。

「坊ちゃま。この方に謝って下さい」

「ふざけるな！！何でこの僕がこんな輩に謝るなど！！」

パンッ！！

「グハッ！！」

女性は青年の左頬にビンタを打つ。

かなりの威力で青年の首が後ろに向くほど。

「謝って下さい」

「だから……………」

パンッ！！

「謝って下さい」

「人の話を……………」

パンッ！！

「聞いて……………」

パンッ！！

パパンッ！！

パパパンッ！！

「どうか愚かなわたくしめお許し下さい」
青年は土下座していた。

「少々卑屈ですが良いでしょう」
何事もない様子の女性。

「き、気にしないでくれ」
そう言いながらアールスの頭の中では警報音が激しく鳴っている。
この二人に関わるなど。

「この依頼は譲る。ではこれで」
兎に角此処からすぐさま退散する。そう決めたアールスは相手の様子等無視して立ち去ろうとする。

が、

「お待ち下さい」

「な!？」

背を向けた筈の相手が目の前に居る。

（なんて動きだ!？）
アールスは自分の目を疑った。自信過剰ではなく今のアールスの実力はかなりの物と言える。

それがこの女性の動きを目で追えなかったのだ。

「お話があるのですが宜しいでしょうか？」

アイルスは頷くしかなかった。

19話 ヘタレ長男

ザルマドから馬車で西へ半日の所にジープ山脈はある。

ジープ山脈は大小の山々が連なり遠くからだと言われ、波のようで別名『山津波』とも言われている。

魔物が数多く生息しているが貴重な鉱石や『神滅石』があるためこの場所絡みの依頼は多い。

「日が暮れるぞ」

「そ…そんな事言われなく……とも」

「坊ちゃん、無駄口叩く暇があったら足を動かして下さい」

三人は延々と続く山道を進んでいる。

依頼書にあったグレイグドラゴンまでは山道を半日は歩かねばならない。

何故アールズがこの二人と一緒に居るのか？

チエルリーと言われていたメイド姿の女性に話があると言われ三人

は少し早い昼食を食堂で取る事にした。

「アールスだ」

「僕はナテランタ家長男バウリ・ナテランタ」

「ナテランタ家に仕えさせて貰っておりますチェルリーと申します」

注文をした後三人は自己紹介しアールスとバウリは座り、チェルリーはバウリの斜め後ろに控える。

「ナテランタ家？」

聞き覚えのある家名だった。

ナテランタ家はこの国で有名な貴族。

昔にあった戦乱時に多大な武勲を挙げた事で名を馳せた言わば武の貴族。

「そうだ僕がそのナテランタ家長男にて次期当主のバウリ・ナテランタだ！！」

バウリは立ち上がり高々と宣言する。

周りは何事かとざわつくがそれから特に何か起こる訳ではなかったので直ぐ元に戻る。

「坊ちゃまお座り下さい」

チェルリーに言われたバウリは少し気まずそうに座る。

「改めて先程は申し訳ありませんでした」

「まあ悪かったよ」

丁寧にお辞儀をするチェルリーに、仕方なくといった感じのバウリ。

「それはもういいよ。で？」

「はい。この依頼なのですが坊ちやまとパーティーを組んで戴けないでしょうか？」

「チェルリー何を言う！？僕一人で充分だ！！」

「坊ちやまその依頼書を良くご覧になって下さい」

「……………くっ！？そう言う事が」

バウリは依頼書の内容を確かめ納得する。

「バウリ、君のランクは？」

「Aだ」

成る程とアールスも合点がいく。

依頼書にはランクがAの場合複数人必須とある。つまりAランク一人では請けない。

「しかしチェルリー！！彼がランクAとは限らないじゃないか！？」

「いえ解ります。少なくともS以上でしょう」
「そう言いアールスを見やるチェルリー。」

「ああ。Sランクだ」

「何！？」

「…Sですか？」

驚くバウリだがチエルリーは意外そうな顔をする。

「事情があつてな」

「そうですね」

アールスの言葉にチエルリーはそれ以上聞かない事にした。

「俺よりチエルリーさんがバウリとパーティーを組めばいいんじゃないのか」

アールスは軽くSランク以上の実力がチエルリーにはあると見ている。

が、チエルリーは頭を横に振る。

「私が坊ちやまの手伝いをするわけには行かないのです。これは坊ちやまがナテランタ家を継ぐ為の試練なのです」

ナテランタ家は武で今の地位にある貴族。

そのため当主には相応の実力が必要となる。

それを証明するためにギルドランクがS以上なければならない。でなければ、いくら長男とは言え当主にはなれないとの事。

アールスは運ばれて来た食事 handed 手を付けながら説明を受けた。

「Sランク以上か…」

それは厳しいなとアールスは漏らす。

ギルドランクのAまでは極端な話、ランクの低い依頼を年数さえ掛ければ成れる。

ランクを上げるにはポイントを稼ぐ必要がある。ポイントは依頼を

こなす事で稼ぐ事が出来、設定されたポイントを貯めれば上がる。
しかしAからSに上がる為にはAランクの依頼を請けなくてはならない。

Aランクの依頼は難度が高くそれこそ命の危険がそれ以下の依頼より遥かに高い。

だからこそSランク以上の冒険者は多くない。

「心配しなくても良い。あなたは着いて来るだけで構わない」
バウリは自信に満ちた笑みを浮かべる。

「Sランクなどあつと言う間になってみせる!!」

「それより坊ちやま、香草もちゃんと食べて下さい」
バウリの皿には香草が綺麗に避けられている。

「苦いんだ」

「好き嫌いは許しません」

「ふっふっ!!」

バウリの口に無理矢理香草を突っ込むチェルリ。

「スナナリ済めばいいんだがなあ」
叶わぬ願望をアールスは呟いた。

その翌日。

その依頼を受けたバウリはアールスとパーティーを組みチエルリーを含め三人でグレイグドラゴンが生息している場所を目指していた。因みにヴェルマーレにその事をアールスは言っただがまるで興味が無いらしく、「頑張ってえ〜」と何の感情の籠もっていない声援を言い残しまた飲みに出かけて行った。

そして早くもアールス後悔していた。

山道を進んでいるのだがバウリが遅すぎて中々着かない。何しろバウリは全身鎧を付けているからだ。

アールスが脱いでいけと言っても頑なに拒否する始末。

疑問に思っていたアールスだったが何となく解った。

それは道中魔物に遭遇した時。

その魔物はレッドウルフ三匹。ランクはCでそこその腕があればさほど手こずらない相手。

しかしバウリは慌てふためき逃げようとし転び起き上がれなくなる始末。

レッドウルフはアールスが三匹とも難なく仕留めたので問題なかったが検討がついた。

バウリは正直弱い。そしてヘタレ。

ランクがAまであるのは恐らく討伐系の依頼は避け採取系等の依頼

を請けなるべく戦闘に関わらないようにして来たのではとアールスは思い休憩時にチェルリーに聞いてみた。

「その通りです」

チェルリーはアッサリと肯定した。

「どうするんだ？あんなじゃとてもじゃないがグレイグドラゴンを倒せないぞ」

「はい無理です」

「おいおい……代わりに俺が倒せって事か？」

アールスの実力ならば簡単だが正直あまり良い気分ではない。

「いえ。今回は倒せなくても構いません」

木陰でグロッキー状態のバウリにチェルリーは目を向ける。

「ナテランタ家の当主は有事の際兵士の先頭で指揮を取らなくてはなりません。でも坊ちゃまにはまだそれだけ器量と覚悟がありません。今回はそれが少しでも身につけばと思ったのです」

「じゃ俺の役目は？」

「いざとなったら坊ちゃまを担いで逃げる為です」

「あんたが担げばいいだろう」

「女性が男性を担ぐなんて出来ませんわ」

コロコロ笑うチェルリーを恨めしく睨むアールスだった。

「ここのようだ」

休憩時から数時間程でようやくグレイグドラゴンが居ると推測された場所まで来ていた。

周りを山に囲まれた中ポツカリとある平地。そして目の前には巨大な洞穴。

グレイグドラゴンは空を飛べない竜種。こういった洞穴を住处にしている。

「覚悟はいいか？」

アールスは後ろで剣を構えるバウリに話し掛ける。

「も、勿論だ!!」

声はかすれ顔は真っ青、膝はガクガクと震えている。

（駄目だこりゃ）

予想通りの様子にアールスは溜め息を吐く。

「来た!!」

アールスの声に場が更に緊張する。

洞穴から出てくる影。

二本足で立ち鋭い爪。岩のような強固な鱗を全身に纏う竜。

「グラアアアー!!」

ジープ山脈の主グレイグドラゴンがその姿を現した。

雄叫びは山を震わせる。

（へえ、意外だ）

アールスは後ろをチラリと見て感心する。
逃げるだろうと思っていたバウリは微動だにせず震えてもいない。

「援護は任せろ！！思いっきり戦って来い！！」

主役はあくまでバウリ。危なければ助けるつもりだが出来るだけバウリにやらせるつもりだ。

「アールスさん。退却しましょう」

しかしチェルリーから意外な声が掛かる。

「何言ってる！！あんたの主はやる気なんだぞ！！」

チェルリーにアールスは怒る。

バウリは恐怖を抑えグレイグドラゴンに挑もうとしている。それを止めるのは許せなかった。

「坊ちゃんまは気を失っています」

「……………へ？」

よくバウリを見ている。

立ってはいるが身動き一つしない。目の前で手を降るが反応なし。

「このヘタレがー！！」

アールスはバウリを担ぎ上げ急いでその場を後にした。

20話 特訓

夜。

アールス、バウリ、チェルリーの三人は宿に戻っていた。その時に解ったのだが三人共同じ宿に泊まっていた。

三人は一階にある食堂にいた。

アールス、バウリが座りチェルリーが後ろに控える。

「なんだい、辛気臭いね」

女主人のラメドが麦酒とつまみをテーブルに置く。

ラメドの言う通り場は沈んでいた。

アールスはバウリの予想以上なヘタレ具合に呆れ、バウリは気絶した時に失禁してしまいすっかり意気消沈。チェルリーは立场上積極的に自分から話す事はない。

「済まないねラメドさん」

「何水臭い事言ってんだい、これくらい構わないよ」

アールスは礼を言くとラメドは気にするなと笑い奥へ消えて行く。

アールス達の様子に気を利かせてくれたラメドが早めに食堂を閉めてくれたのだ。

「これをギルドから貰って来たんだが」

アールスはテーブルに数枚の紙を並べる。

促されたバウリはその内の一枚を手取る。

「なんだいこれは？」

「職業案内さ」

ギルドは何も冒険者だけの施設ではない。依頼とは別に従業員や職人の見習いの募集といった職業案内もしている。

「俺のお勧めはこの武器職人の見習いだな。体力もつくし食いっぱぐれない」

「こんな物要らん！！私はナテランタ家の当主になる身だぞ」

「はあ？」

「何をそんな不思議そう顔をする！！」

「無理だろ」

「何を根拠に！！」

「皆まで言わすつもりか」

「うつ！？………し、しかし他の依頼なら何とかなる筈だ！！」

確かにグレイグドラゴンの討伐はAランクの依頼でも高難度と言える。

しかしと、アールスはまた紙を並べる。

「他のAランクの依頼書の写しを借りてきた。選んでみたらどうだ？」

望む所だとバウリは真剣に検討し出す。

「バジュラスネークの討伐、これなら!？」
バウリが依頼書見せる。

「バジュラスネークは猛毒を持っている。かすり傷一つであの世行きた、因みに解毒の方法はない」

アールスの言葉に固まったバウリはその依頼書をソツと脇に避ける。

その後も同じようなやり取りがあり、結局アールスが持ってきた依頼書全てが無理と判断された。

「うつうつ……」

「諦めなつて。地道に働くのも悪くないぞ」

うなだれるバウリにポンポンと肩を叩き就職案内を勧めるアールス。

「アールスさん、坊ちやまをあまり苛めになさらないで下さい」

「虐めてる訳じゃないんだけどな」

バウリが当主を継げないとなるとそのまま屋敷に居れなくなるだろうと見当はつく。かと言ってバウリの実力で冒険者を続けるのはキツいだろう。

なら手に職を付けるのも悪くないだろうと思ったのだ。まあ多少悪戯心はあったが。

「ふああゝあ、変な時間に起きちゃった」

そんな時起きたヴェルマーレが二階の部屋から降りてくる。

「飲みに行つてなかったのか？」

普段なら外か部屋で飲んでいるヴェルマーレ。

「一眠りして出掛けるつもりだったんだけどね。寝過ぎたみたい」

アールスの隣に座り置いてあつた麦酒を飲む。

「寝覚めには効くわねえ。で、この子達が朝言つてた？」

「ああ」

アールスは今日あつた事を大まかに話す。

ヴェルマーレは笑いながら聞き美味しそうに麦酒を飲む。

「美しい……」

「どうしたバウリ？」

「坊ちゃま？」

さつきまで落ち込んでいた様子のバウリがいきなりヴェルマーレの手を握る。

「私はナテランタ家長男、バウリ・ナテランタと言います。貴女のお名前は？」

「ん？ヴェルマーレよ。ナテランタ家？随分懐かしいわね」

ナテランタ家に覚えがあるらしくニヤニヤするヴェルマーレ。

「私は近々ナテランタ家の当主になります。ヴェルマーレさん、私の妻になりませんか？」

「それはそれとして」

ヴェルマーレはバウリの手首を掴む。

「気安く女性に触るんじゃない!!」

バウリを引っ張り上げ床に叩きつける。

「ぐへー!!」

目を回し沈黙するバウリ。

「意外と逞しいなコイツ」

「あの……」

床に寝るバウリを隅に退かしたチエルリーがヴェルマーレに話し掛ける。

アールスやバウリの時と違い何やら緊張した様子。

「私チエルリー・バレタインと申します。ひょっとしたら貴女様は『女神』の……」

「バレタインと言うと確か……」

「私の曾祖父はバルザ・バレタインと言います」

「バルザ……へえ、じゃあ貴女が曾孫って事？」

「はい。ヴェルマーレ様のお話は小さい頃よく聞かせて戴きました。私がこうして居れるのも全てヴェルマーレ様のお蔭だと」

チエルリーの頬はほんのり赤くなっており口調も興奮気味だ。

「いいのよ、偶々だったから。て事はあの子は……」

未だ目を覚まさないバウリに目を向けるヴェルマーレ。

「今私が仕える主です」

「ふゝんあれが。大変ねえ」

「いえ。そんな事は」

「ま、これも縁だし私も手伝うわ」

「本当ですか!？」

「持ちの論よ。さて……………特訓ね」
その笑みにアールスはゾツとした。

翌日。

ヴェルマーレを加えた一行は街から出て森に来ていた。

バウリは何時もの鎧姿に剣を構えている。しかし顔は真っ青で若干涙目。

そのバウリが対峙しているのは花。

茎から瑞々しい葉を生やし真っ赤な花には黒色のまだら模様。
何の変哲もない植物。

大きさが五メートルを越えているのを除けば。

「食人植物のアリアちゃんです」

「シャアアー!!」

ヴェルマーレの紹介に応えるように花の中心が口のように開く。

「あ、あのヴェルマーレさん」

震える声のバウリ。

「お、質問？言ってみんさい」

「これは一体……」

これとは勿論目の前の植物の事。

「Aランクの依頼を達成したいんでしょう？なら強くなんなきゃ。強く成りたいんなら実戦あるのみ!!そんなアリアちゃんよろしくー!!!」

「シャアアー!!」

「うわああー!!」

バウリの様子を離れた場所で眺めるアールスとチェルリ。

用意された朝食代わりに飲み物とサンドイッチを摘むアールス。

「あれは中々手強いんだよなあ」

自身も昔、特訓と称しあの植物と戦った事があるアールス。

「まあ俺の時は三匹……いや三株だったが」

「アールスさん」

「何です？」

「アールスさんはヴェルマーレ様の事ご存知で？」

「全部じゃないが大体な」

「そうですね……ヴェルマーレ様は私と坊ちやまの恩人なのです。正確にはお互いの曾祖父がですが」

「へえ」

「驚きました、まさかアールスさんが今のヴェルマーレ様の連れ添いとは」

「その言葉は誤解を招くなあ。ま、色々あつてな」不本意だがなと付け加えるアールス。

「聞き伝えではヴェルマーレ様は大変なご使命があるとか……」

「まあな、最近も死にかけた」

「曾祖父が「あの方は孤独だ、だから誰かが支えなくてはならない。それが我々に出来る数少ない事だ」と、とても申し訳なさそうに言っていたと祖父が話してくれました」

「……………」

アールスはそれに答えず黙ってバウリと食人植物の戦いをただ見ている。

「私達はあの方に何をしてあげられるのでしょうか……」
チエルリーは俯き悲痛な表情を見せる。

「あいつはそんな事望んじやいないさ」

「しかし!？」

「俺達は出来る事をやればいい。それと……」
バウリが食人植物に捕まり泣き叫んでいる。

「そろそろ助けに行くか」
剣を手に取り走り出す。

「それに何ですか!？」
後に続くチエルリーに振り向き、

「無闇やたらに死なない事だな。あー後は旨い酒でも奢ってやれば
充分だろ」
アールスはそう言った。

21話 強さとは…

アールス、バウリ、チェルリーの三人は再びジープ山脈を訪れていた。

ヴェルマーレによる特訓は三日間続いた。

当初食人植物のアリアに何度も食われたバウリだったが三日目には、倒せは出来ないものの何とか捕まらないようになった。

ヴェルマーレ曰わく今のバウリは戦う面において実質Cランクの能力が在ること（本来のランクはAだが実力が伴っていない）。

本来ならもつと日数を掛けたかったのだが依頼の達成期限まで後二日しか無かった為特訓を切り上げて此処へ来た。

勿論今のバウリの実力ではグレイグドラゴンの討伐は夢のまた夢。

そんな事はアールスとチェルリーは解っている。要はバウリがどれだけの気概を見せるか。

また気絶でもしようものならアールスは見捨てるつもりだ。

「待っているグレイグドラゴン！！あの時の借りは返すぞ！！」

そんな思惑を余所にバウリはやけに張り切っていた。

今のバウリは以前までの全身鎧姿ではなく肩、胸部分だけに金属製の防具をしている。

アリアとの特訓でバウリ自身があのだ鎧をつけてはまともに戦えないと実感したのだ。

「ま、精々漏らさんようにな」

「大丈夫ですよ坊ちゃま、替えの下着は持ってきております」

「漏らさん!!」

「ぜえぜえ…どうだ私の實力は!!」

バウリは剣を杖代わりに立ち膝をガクガクさせている。

「うんまあ、良かったな」

「見事です坊ちゃま」

その様子に呆れるアールスに何故か感激しているチエルリ。

道中一匹のブラッドウルフに遭遇したアールス達。

ブラッドウルフはランクD。丁度良いのでバウリに相手をさせた。

戦いは熾烈を極め何とかバウリが勝った。

「しかしいくら採取中心の依頼ばかり請けててもこの實力でAランクってのは上手く行きすぎじゃないか？」

バウリに聴こえないようチエルリに聞く。

確かに採取中心の依頼ならあまり魔物と戦わなく済む。

しかしそれはゼロではなく逃げるにしても何時も上手く行くとは限らない筈だ。「つい私が倒してしまいました」

気まずいのか顔を伏せて話すチエルリ。

「成る程ね」

そういう事なら納得とアールス。

どうやら意外とこのメイドは主に甘いようである。

「しかし今回は出来るだけ手は出さない覚悟です」

「それはナテランタ家の意志か？」

「はい。坊ちやまにお教えなくてはなりません、ナテランタ家を支える想いを」

決意の籠もった目をするチェルリー。

「何をしている！！さつさと急ぐぞ！！」

未だ膝を震わせているバウリだが一人で先を歩いていく。

「申し訳在りません」

「根性は多少付いたか」アールスとチェルリーはバウリに追い付こうと駆け足で近付く。

その時脇道の繁みから冒険者らしき姿の男三人に女一人が飛び出してくる。

彼らは皆顔を恐怖で歪ませていた。

「どうした！？」

ただ事でない様子にアールスが直ぐに駆けつける。

「グ…グレイクドラゴンが……」

「何！？近いか！？」

アールスの問い掛けにカクカクと頷く。

拙いと舌打ちするアールス。

本来グレイクドラゴンは奥地にしか生息しない。

しかし此処はまだ中間地点でグレイクドラゴンが居るはずがない。
だとすれば何かしらの原因があるのだろう。

そしてアールスにはその原因に心当たりがあった。

バウリ達と最初に遭遇したグレイクドラゴン。

バウリが気絶してしまったため何もせずに引き返した。そしてその
せいでグレイクドラゴンの気が荒れこんな所まで出て来た可能性は
あった。

「おいカレナは何処だ!？」

「居ないよ!!まさか!？」

冷静になった冒険者達が騒ぎ始める。
どうやら仲間が一人居ないようだ。

「坊ちやま!？」

チエルリーの悲鳴にも似た声が響く。

「どうしたチエルリー!？」

「坊ちやまが!？」

チエルリーの視線は冒険者達が出て来た繁みに。

「あの馬鹿!!」

アールスとチエルリーはバウリの後を追った。

彼女は目の前の状況に絶望していた。そこには彼女を獲物と決めたグレイクドラゴンが今まさに襲いかかるうとしていた。

逃げたいのだが足首を捻ったようで立つことも出来ない。

今回の依頼はヤツハメ草の採取という簡単な物だった。

なのに来てみれば居るはずのないグレイクドラゴンが現れた。

仲間達は我先にと逃げてしまった。

だからと言って恨みはない。目の前にいきなりグレイクドラゴンが現れれば大抵の冒険者は逃げる。

対抗出来るのは極一部の高ランクの冒険者だけだ。

「この私が相手だグレイクドラゴン!!」

諦めたその時一人の男がグレイクドラゴンの前に立ちふさがる。

バウリだ。

ひよつとすれば自分は助かるかもと彼女に希望が湧く。

グレイクドラゴンは冒険者の中で高難度の魔物として有名で、勝てる見込みが無ければ戦おうとは絶対にしないからだ。

しかし彼女は落胆する。

バウリの身体は小刻みに震え足元もおぼつかない。

とても高ランクの冒険者とは思えない。

「早く逃げて!!」

彼女は声を張り上げる。

自分はどうがな。冒険者になった以上覚悟はしている。

しかし身も知らない人間を巻き込むのは気分が悪い。

「だ、大丈夫だ！！私がまも…守ってみせる！！」

「強がるんじゃないって！！私はいいいから！！」

バウリはチラリと振り向く。顔は青ざめ冷や汗が一杯だ。
しかし目だけはしっかりと彼女を捉える。

「私はナテランタ家長男バウリ・ナテランタ！！怪我をして身動きの取れない女性を見捨てるなど有り得ない！！」

「！？でも怖いんだろう」

「怖い！！しかし此処であなたを見捨てる私とは本物の弱い者になる！！それだけは絶対嫌だ！！」

身体を震わせ涙と鼻水を流しながら絶叫するバウリ。
決して格好よくない。

しかし譲れない信念が見て取れる。

「ガアアアー！！」

しかしグレイクドラゴンにとってそんな事は関係ない。
雄叫びを上げ二人に襲った。

（あんな姿はもう絶対に晒さない！！）
バウリは逃げずせめて一死報おうと剣を構える。

「うおおお！！」

剣を振るうバウリ。

が、接触する直前。

「グギヤアアア!!」

見えない壁に弾かれようにグレイクドラゴンが吹き飛ぶ。

「見直したよバウリ」

「坊ちやまご無事ですか!？」

ギリギリ間に合ったアールスとチエルリー。

「チエルリー……」

膝から崩れ落ちるバウリ。

「坊ちやま、そのお心こそナテランタ家の当主が受け継ぐもの。
強さとは弱き心を奮い立たせる心なり」。曾祖父様の言葉です」
それを受けとめ優しくバウリの顔を撫でるチエルリー。

「さてそこの方」

へたり込んでいる女性にバウリを預ける。

「バウリ様を預かっておいて下さい。お願いしますね」

その迫力に女性は何度も頷く。

「この腐れ蜥蜴………覚悟しやがれ」

それから数分後グレイクドラゴンはただの肉塊と化した。

その後も何故か女性とアールスは震えが止まらなかった。

「んじゃかんぱーい!!」

無事に依頼を完遂しザルマドに戻った一行はヴェルマーレを交え食事をしていた。

「んゝまい!!」

麦酒を一気に飲み干し満足げなヴェルマーレ。

「何か疲れた…」アールスはグツタリとしてチビチビ食べる。

「坊ちやまお口が汚れてますよ？」

「チエルリー止めないか!!自分で拭く!!」

世話を焼くチエルリーに焼かれるバウリ。

それぞれの時間が過ぎる。

食事が終わり皆、バウリの部屋に呼ばれていた。

「ヴェルマーレさん」

バウリは何時買ったのか豪華な花束を取り出しヴェルマーレに差し出す。

「私もこれでナテランタ家を継ぐ事が出来ました。ヴェルマーレさ

んナテランタ家に嫁いでくれませんか？」

「坊ちゃま言い忘れてましたがランクは上がってませんよ」

「……………はあ？」

意味が解らないのか目が点になるバウリ。

「実際グレイクドラゴンを倒したのは私ですので」

「何だとおー！！」

「ご安心下さい、坊ちゃまのお心は既にナテランタ家当主に相応しいものです。後は実力を付けるだけです」

「そ、そんな…」

うなだれるバウリの頭をヴェルマーレはポンポンと叩き、

「ま、頑張んなさい。200年位なら待ってて上げるから」
実に楽しそうに言ったのだった。

昔話 ナテランタ家 前編

此処はある国の国境付近。

辺りは激しく斬り合う戦士達に飛び交う弓矢。

怒声と悲鳴が絶えることがない。

此処は戦場だ。

「う、うわぁ!!」

剣を弾かれその場に倒れ込む男。

「邪魔なんだよ!!とつとと死ね!!」
振り下ろされる刃。

「ぐはぁ!!」

しかし鮮血を上げ倒れたのは切りかかった男だった。

「貴様何をしている!!戦えないなら引つ込め!!」

「くっ、くそぉ!!」

闇の中で揺らめく炎。

昼間が嘘のように静かな夜。

見張りの人間を除けば大半が寝ている。

ディシル・ナテランタは焚き火の炎をジッと見ている。細身の身体には包帯が巻かれ、本来なら端正な顔はゲツソリとしている。

「此処にいたか」

右目に傷のある男がディシルの隣に座り酒瓶から直接飲む。

「バルザか……」

ディシルはちらりと見た後また焚き火に目を戻す。

彼の名はバルザ。

『隻眼のバルザ』と言われている凄腕の傭兵だ。

「故郷に帰ったらどうだ？やはりお前は向いてない」

「向いてない事ぐらい解ってる。でもおめおめ帰る訳にはいかない」

ディシルは依然と焚き火から目を放さない。

「やれやれ、じゃあこれでも飲んで寝ろ」

バルザは持っていた酒瓶を押し付けるように渡す。

「……ああ」

ディシルはそれに口を付けた。

ナテランタ家は貴族なのだが位は無く最下層に位置する下級貴族。今現在ナテランタ家の所有する領地は戦争の影響と不作で多くの領民が飢えている。

貴族として大した力の無いナテランタ家は何も出来ない状態が続いていた。

ならばと立ち上がったのがナテランタ家長男のディシルだった。名乗りを上げ戦争に参戦。

武勲を挙げれば国王から多大な報奨を得る事が出来地位も上がれば領地を救う事が出来る。

ディシルはそう思い立ち参戦した。

しかし2ヶ月経ち当初500人いたディシルの軍は今や100人を切っており皆、満身創痍の状態。それでも何とか出来ているのは途中で知り合ったバルザのお蔭である。

本来ならバルザのような傭兵がディシルに雇われる事はない。

バルザは武力もさることながら指揮能力もあり雇おうとするなら高額な報酬が必要となる。

資金に余裕のないディシルではとても無理な話。

しかし何故か二人は会った当初から意気投合しディシルを気に入ったバルザは格安で傭兵の仕事を請けた。

ディシルは貴族とは言っても平民により近い生活をしてきたため貴族に有りがちな傲慢な性格ではなかった。

バルザは仕事上色々な貴族を見て来たがディシルのような貴族を初めて知り友人となったのだった。それだけにバルザは今のディシルが心配だった。

元々戦いに向いた性格ではなく強くもない。

初めての戦争で心身共に衰弱しているのが見て取れる。

しかし何も武勲を得ていない今引けば参戦した意味がない。

ディシルは今八方塞がりだった。

翌朝。

酒のお蔭か少しは寝れたデイシルは川で顔を洗っていた。

「みつともない顔だ」

水面に映る自らの顔にため息が出る。

デイシルはこの戦争に参戦を決意した時から死ぬ覚悟は出来ている。

いや、出来ていたはずだった。

家の為領民の為になるなら本望だと思っていた。

しかしデイシルは怖かった。

死を。

その情けなさに自分が嫌になる。

「ん？」

戻ろうかとした時物音がした。

デイシルは腰の剣を抜く。

野生動物ならまだいい。しかし魔物や忍び込んだ敵兵だった場合デ

ィシル一人では手に余る可能性がある。

デイシルはそれから徐々に距離を置く。

自軍まではさほど離れていないから走れば何とかなる。

そう考え走ろうとした時それは突然姿を見せる。

それは金髪の女性だった。
それともかなりの美貌。
その女性が倒れた。

「あ！？大丈夫ですか！？」
敵兵の可能性が無いわけではなかったものの放って置く訳にもいかず近づき抱き起こす。

「しっかりして下さい！？何があつたんですか！？」

「お……………」
女性の口から言葉が漏れる。

「何ですか！？」
聞き逃すまいと耳を女性の口に近づけるディシル。

「お……………」

「お？」

「お酒飲まして……………」

「……………は？」

「ぷはあー！！生き返るう！！」

女性を自軍まで連れてきたディシル。

昨夜バルザから貰った酒瓶を渡し受け取った女性は一気に飲み干した。

「いやあ助かったあんがとね」

「それはいいんですが何故倒れてたんですか？」

「お酒が切れちゃってね。飲まないと歩く気も無くなっちゃうのよ」

「はあ」

何と言っているのか解らず曖昧な返事をするディシル。

「私はヴェルマーレ。あなたは？」

「あ、はい。ディシル・ナテランタと言います。え〜とヴェルマーレさんは何故あんな所に居たんですか？」

「ん〜まあ色々と事情があってね」

「事情ですか……傭兵が何かですか？」

「ううん」

ディシルは首を傾げる。

この付近で戦争があるのは誰でも知っている。
なのに兵士でも傭兵でもないのにあそこに居た。

敵の密偵にしてはやけに堂々としている。

「あなた貴族？」

「え？ええまあ」

「なら私を雇わない？」

「雇う？………！？」

ヴェルマーレの提案に何か思い立ったディシルは顔を真っ赤にさせる。

戦場に兵士の慰安の為売春婦を雇う軍は多い。

特に戦いが長くなると兵士達の士気は下がる。戦場に娯楽等は殆ど無いからだ。

それを防ぐ為である。

地位の高い貴族ともなると自分専用の売春婦を雇う事はよくある。

「いや！？あの！？自分は結構です！！」

見るからに取り乱すディシル。

そんなお金も無いという事もあるがディシルは其方方面面が苦手でもありウブでもあった。

「あつははは！！違う違う、傭兵としてよ」

「え！？あ！！」

「案外スケベねえ」

「面目ありません」

あまりの恥ずかしさに俯く。

「どうしたディシル」

バルザが通りかかり声を掛ける。

「バルザ！？実は……………」

バルザにヴェルマーレの事を話すディシル。

「ほう…」

バルザは目を細めヴェルマーレを見やる。

「なら俺が腕を見てやろう」

「ちよっ！？バルザ！！」

「大丈夫だ本気は出さん」

「試験？良いわよ」

「ヴェルマーレさんまで！？」

あれよあれよと言う間にバルザとヴェルマーレが戦う事になってしまふ。

開けた場所に移りいつの間にか野次馬が取り囲む。

「いいかいバルザ！！絶対怪我をさせちゃ駄目だよ！！」

最早止めれないと悟ったディシルは諦めなるべく穏便に済むようバルザに言い含める。

「さあどうだろうな」

「こらバルザ!!」

バルザは惚けるように言うとヴェルマーレと対峙する。

「ルールはどちらかが降参するまでいい?」

「構わない」

「まったく。始め!!」

デシルの合図と共に構える二人。

二人とも武器は剣。

バルザは半身に構えヴェルマーレは正面に立ち剣を突き出すようにする。

バルザはジリジリと円を描くように動くがヴェルマーレは微動だにしない。

周りの野次馬はバルザが勝つに決まっているという雰囲気がある。

それも無理はなくバルザの強さを直に見ればそう思う。

しかしバルザ自身に自惚れはない。戦場で油断をすれば命を落とす事位は身に染みて解っている。

相手が女性でも同じである。

バルザと互角の腕を持っている女傭兵も居る。

しかしそれでもバルザは戸惑っていた。

長年の勘からヴェルマーレが弱くないのは解る。隙が無く攻めどころが難しい。

なのにヴェルマーレから戦意が感じられない。

まるで子供の稽古をしている親のように。

戦う気がないのか或いは実力がかけ離れているのか………

「ふっ!!」

ヴェルマーレの真横まで移動したバルザが攻める。

「へえ、早いね」

軽く避けたヴェルマーレは右蹴りを放つ。

「ちっ!？」

顎を狙ってきたその蹴りを間一髪で避け間を開ける。

シンと静まる辺り。

予想外の事に啞然とする。

「今度は私からね」

ヴェルマーレは瞬時に間を詰めバルザに迫る。

「何!？」

バルザは余りの速さに反応出来ず鼻先に剣を突き立てられる。

「どう?」

「参った、完敗だ」

一斉にどよめく一同。

あの『隻眼』が手も足も出せず負けた。しかもその相手が美女。

「雇ってくれる?」

「デシル。是が非でも彼女を雇え」

負けたのを全く気にした様子のないバルザと爽やかな笑顔のヴェルマーレ。

「た、確かにヴェルマーレさん程の強さなら。でもお恥ずかしい話
しなんですが資金に余裕がなくて」

「お酒飲ましてくれればいいわよ」

「それでいいんですか？此方は有り難いですが」

「ええ。こっちの目的に都合もいいし……」

ヴェルマーレはスツとディシルまで近付き頬にキスをする。

「へ？」

「あなた可愛いから」

真っ赤な顔のまま倒れたディシルをヴェルマーレは腹を抱えて笑っ
た。

昔話 ナテランタ家 後編

「くつくつくつ……」

男は一人笑う。

それは何時からだったか覚えていない。
湧き出る黒い感情。

殺す、殺す、殺す。

それを満たす度に得も言われぬ快樂が身体を駆け巡る。

「もつとだ……もつと殺したい……」

またあの快樂を味わいたい。

「我は神を滅ぼす者……」

ドクンと心臓が脈打った。

ディシル、ヴェルマーレ、バルザの三人は自軍から離れ別の場所に
居た。

「中タイケるわね」

「塩が効いてるな」

出された料理を美味しそうに食べるヴェルマーレとバルザ。

「……………」

しかしディシルだけが浮かない顔で食事に手を付けずに居た。

「どうしたディシル？」

食べとかないと保たないぞ？」

「……………」

「其処のお兄さんお酒ない？」

「おいおい姉ちゃん、昼間だぜ？」

「関係無いわよ。飲みたい時に飲む、それが私の生き方よ」

「言うねえ、ほれ」

「んふふ」

ヴェルマーレは小さな酒瓶を渡され満面の笑みを浮かべる。

三人は敵陣の真っ只中に居た。

結局禄に食事も取れなかったディシルは気分を悪くし兵士用天幕内で休んでいた。

「ヘタレねえ」

「言つてやるな」

ヴェルマーレは呆れているが仕方の無い事でもある。

何せ現在進行形で戦争をしている相手の軍に居る。

もし敵だとバレればどんな目に遭うか解らないのだ。

そうするとディシルのようになるのは無理はない。

寧ろヴェルマーレやバルザのように自然体になっている方が凄いのだ。

そもそも何故三人がこんな所に居るのか？

ヴェルマーレがディシルの軍に加わったのだがそれで戦局が変わる訳ではない。

ディシル等自ら軍を率いている貴族達には多少ではあるが国軍から物資などの支給はある。しかし殆どが自前になる。

だからこそ武勲を上げれば莫大な報酬が約束されている訳だ。

しかしこの戦争はまだ続く。

これ以上戦争が長引けば資金が底を突き軍を維持出来なくなる。

ならばとヴェルマーレは提案した。

なら早急に戦争を終わらせ尚且つ殊勲を得る方法。

敵のトップを倒す事。つまり暗殺。

これに当初ディシルは猛反対した。

いくら没落寸前でも自分は貴族。そんな卑怯な事は出来ない。

が、ヴェルマーレは淡々と説明した。

戦争が勃発した時、そんな事をすればそれこそ卑怯者となじられ報

酬等貰えても少しだろう。

しかしこの戦争は二年以上続いており、なまじ双方の戦力は拮抗しているため消耗戦になっている。

そうなると国力は徐々に衰え、勝ったとしても復興には時間と莫大な資金が必要となってしまう。

実際両軍には暗殺未遂が多発している。

つまり正々堂々勝つよりどんな手を使っても戦争を終わらせるのが重要なのだ。

だが依然渋るディシルにヴェルマーレは悪魔のような笑みでディシルに言った。

「暗殺じゃなくて決闘するの。ディシルが」

ヴェルマーレの作戦はまず敵軍に潜り込み、決闘する状況を作り上げる。決闘の相手は最高司令官のビグ・アラカーム。

ビグは今や敵国の王より権力があり、彼を倒せばこの戦争は勝ちと言っていい。暗殺ではなく正々堂々と決闘で倒したとなれば貴族としての名誉は傷つかず英雄として迎えられる。

と、簡単に言うヴェルマーレ。

真っ青になりイヤイヤするディシルだったがヴェルマーレに「じゃ他にある？」

と言われ何も言えず沈黙せざる負えなかった。

それから敵軍に到着したのだが潜り込むのも大胆で堂々と正面から「傭兵に雇って欲しい」と言い入り込んだ。敵軍に顔を知られているバルザがどうかと思われたが、元々バルザのような腕利きの傭兵達は戦況が有利な方へ流れる。勝った国の方が金払いがいいからだ。

敵軍もまさか自軍の最高司令官を倒そうとしている者が堂々と来る

とは思わなかった。

「いい？実行は皆が眠る直前よ」

情報で明日早朝、総攻撃を仕掛ける事が解った。
行動を起こすならその前しかない。

眠る直前というのは人間どうしても寝るとなると気が抜ける。その隙を付いてビィグに一騎打ちを申し込む予定だ。

「でも周りが黙ってるとは思えないけど」

「そこは私とバルザが何とかするから」

「はあ…」

ディシルは「何でこの人はこんなに自信満々なんだろう？」と思うものの口には出さない。

「じゃ休んでなさい。時間になったら目覚めのキスしてあげるから」
「」

「休んどけよ」

ヴェルマーレとバルザは天幕から出て行く。

「ヴェルマーレ」

天幕から少し離れた所でバルザが声を掛ける。

「実際大丈夫なのか？」

それはディシルも危惧した周りの多数いる兵士達の事だ。

いくらヴェルマーレやバルザが強いと言っても此処は敵軍のド真ん中。おおよそ2万人の兵士が居る。相手が決闘を受ければいいが無視され捕らえられる可能性は充分ある。寧ろ普通はそつだ。

「決闘は受ける間違いなく」
少しも詰まることなく言い切るヴェルマーレ。

「周りは私が抑えられるから問題なし。兎に角ディシルがどれだけ頑張れるかね」

「ビッグの強さがどれ位なのか知ってるのか？」

「強さ自体は普通。ただ………」
言いかけるがフウと息を吐く。

「まあいざとなったら逃げて。元々私がやらなきゃならない事だから」

「どついう意味………」

「お酒切れちゃったから貰って来るね」バルザが聞く前にヴェルマーレは歩き出した。

死を覚悟している？

どの口がそんな事を言うのか。

それは単に自分を誤魔化していただけ。

怖い………怖くて堪らない。

それが本当の自分なんだ………

「さあ時間よ」

ヴェルマーレとバルザがディシルの居る天幕に入る。

「ディシル？」

しかしディシルは座り込んだまま宙をボンヤリ見ている。

「怖い………怖いんだ………」

身体を震わせ呟くディシル。

「僕は家の為領民の為死ぬ覚悟は出来てると思ってた、思いこんでいた。でも駄目なんだ………怖くて………死にたくなくて………」

涙するディシル。

恥も外聞もなく恐怖から涙する。

「解ってるんだ……だからってどうかなるわけじゃ無い……で
も僕はヴェルマーレさんやバルザのように強くない!!」

「強さって何だと思う?」

ヴェルマーレはディシルの隣に座り涙を指で拭く。

「力が強いから? 剣の扱いが上手いから?」

「……………」

「みんな怖い。死ぬのが一人になるのが
ディシルの頬に手を添え口づけをする。

「!?!」

口を離し見詰める。

「強さってのはそんな崩れそうな弱い心を支えたり押し止めたりし
てまた前に踏み出せさせる心の事」

頭を振りかぶり、

ガンツ!!

「あ痛!!」

思いつ切り頭突き。

「覚えときなさい」

ニヤリと笑うヴェルマーレだった。

「何の用だ」

三人はビッグが居る天幕に来ていた。

見張りの兵士が訝しげな視線を向ける。

「ビッグ司令官にお会いしたいのですが」

多少声が震えているディシルだが毅然とした態度で言う。

「一傭兵如きにビッグ様が会うわけないだろう！！帰れ！！」

「はい交渉決裂」

すぐさまヴェルマーレがその兵士を手刀で気絶させる。

「早くないですか！？」

「時間が勿体ないからちゃっちゃと進める」

ディシルの背中を押し中へ押し込みヴェルマーレとバルザも続く。

中には一人の男が居た。

見た目50歳程か、ブラウンの髪には所々白髪が混じっているが俯いているため顔は解らない。

黒い上質そうな素材のズボンに前止めの上着。

背はディシルと同じ位。

顔を上げる。

瘦けた頬に生氣のない顔色。なのに目だけは血走りディシル達を捉える。

「ほれほれ怯むな」

ヴェルマーレに脇腹を肘で突っつかれスウと息を吸い込む。

「私はナテランタ家当主ディシル・ナテランタ！！貴殿に決闘を申し込む！！」

シンとなる天幕内。

「くつくつくつ…良からう…」

ディシルを見やり決闘を了承するビィグ。

広い場所に移動し対峙する二人。

ディシルは剣を手に素振りを繰り返し、ビィグはただ立っている。

周りの兵士はかなり困惑している様子。

ディシル達がどうやら敵軍の人間だと解り捉えようとする者も居た。しかしビィグが大人しく見ていると命令が下ったため出来ないでいた。

「いい？勝負が着くまで絶対油断したら駄目よ」

「落ち着いて対処しろ。決して慌てるな」
緊張した面持ちで二人の言葉に頷くディシル。

「始めえ!!」

審判役の兵士の号令で決闘が始まる。

正面で構え間合いを計るディシルを余所にビッグはブラリと剣を持つたまま動かない。

「うおお!!」

攻撃を仕掛けたのはディシル。

それを受け止めたビッグは払うように剣を振る。

バックステップで避けるディシル。

攻撃をするディシルに迎え撃つビッグ。

当初は互角だったが次第にディシルの剣がビッグを掠り始める。
服が斬れ血が滲むビッグ。

が、

「ひやはっははー!!」

ビッグは歓喜に似た奇声を上げる。

「くっ!?!」

その狂気に戸惑うディシルだが落ち着いて立ち回る。

「そこだ!?!」

隙を見いだしたディシルは一閃。

ザンッ!!

ビィグの左腕を斬り飛ばした。

「やりましたよヴェルマーレさん!!」勝ちを確信したディシルはヴェルマーレに振り向く。

「馬鹿!!まだ終わってない!!」

「え?.....が!？」

ゾリツという感触が背中に走った後、激痛が襲う。

背中から血が吹き出し倒れるディシル。

側には片腕を失ったビィグが居た。

「死ね死ね死ねえー!!」

叫びながら背中を突き刺そうとするビィグ。

「くそぉ!!」

転がって避け何とか立ち上がる。

出血が酷いのか目が眩み体が寒くなる。

ディシルは情けなく悔しかった。

ヴェルマーレが油断するなど言ったのにしてしまっ自分の愚かさに。

薄れ逝く視界に剣を振りかざし此方へ来るビィグが映る。

避けるか迎え撃つか。しかし身体が動いてくれない。

（ああ.....死ぬんだ.....）

ディシルは自分の最後を悟った。

結局何も出来ず死ぬ。何もかも弱いまま.....

嫌だ………

弱いまま死ぬのは嫌だ！！

ディシルはありったけの感情を自分の心にぶつける。

何をしている！！

そのままでもいいのか！！

俺は戦う！！

自分が自分であるために！！

2人の影が重なる。

ビッグの剣はディシルの顔を掠め、ディシルの剣はビッグの左胸を貫いていた。

「ぐが………」

ビッグの身体から黒い霧のようなものが蒸発するように消えていく。

「ディシル!!」

バルザが駆け寄りディシルを抱きかかえる。

「ほら早く言いなさい」

ヴェルマーレが惚けている審判役の兵士をこずく。

「しょ、勝者ディシル・ナテランタ……」

その宣言を合図に周りがざわめき出す。

最高司令官のビッグが死んだ。

それは同時に自軍を指揮する人間が居なくなった事に気づいた。

「んじゃ行こうか」

「ああ急ごう」

バルザはディシルを抱き上げる。

後は一刻も早く此処から逃げるだけ。

しかし何処からか「捕まえる!!」と声上がる。それはあつという間に広がり一斉に三人に襲いかかる。

「ちっ!!」

バルザはディシルを背負い直し剣を抜く。

全方位から襲い掛かって来る敵兵。

（万事休すか!?!）

「はい止まれ!!」

パチンツとヴェルマーレが指を鳴らす。

すると何千の敵兵達がピタリと動きを止める。

「一体何が………!？」

バルザは見て絶句する。

敵兵達の身体に蔦が絡まり動きを封じ込めていた。

何かしたのはヴェルマーレだろう。

だが何をしたかがバルザは理解出来なかった。

『神滅石』の魔法かと思うがこれだけの数の人間の動きを封じる魔法など見た事も聞いた事もない。

とても人に出来る事とは思えなかった。

「ほら急いで」

「あ、ああ!？」

我に帰ったバルザは急いでその場を離れた。

指揮官を失った敵軍は急速に弱まり制圧されるのは時間の問題となった。

ヴェルマーレ達は自軍に戻りディシルを軍医に見せた。
幸いにも治療は間に合いディシルは一命を取り留めた。

それから暫く経ち。

敵兵からの証言で敵の最高司令官ビィグを決闘で倒したのがディシルだというのは知れ渡りディシルは戦争を終わらせた最大の殊勲者として莫大な報酬と国直属の貴族として迎えられた。

「行くのか？」

小鳥達がさえずる朝。

出て行こうとするヴェルマーレに声を掛けるバルザ。

「もう終わったしね」

「ディシルに会ってやれよ」

「起こすの悪いし」

「……………女神ヴェルマーレ」

ポツリとバルザは呟く。

「『女神の詩』通りなら女神ヴェルマーレはこの世界に居て未だ『神滅』を消滅させている」

「……………」

「長年傭兵をしてるとな色々胡散臭い噂を耳にするんだ。例えば意

のままに植物を操る美女がいる………何てな」

「ビィグって奴変だったでしょ？あれは『神滅』が取り憑いていたから」

「『神滅』！？」

「本当は私がやんなきゃいけない事だったんだけどね。でも丁度いいからディシルにやって貰おうと思ってね………利用させて貰ったの」

「ふっ。非道いな」

「ええ。何たつて女神様だから」
微笑み合う二人。

「じゃあね」

「ほれ饞別だ」
一本の酒瓶をヴェルマーレへ投げるバルザ。

「俺の取っておきだ」

「ありがとう」

それからディシルとバルザはヴェルマーレと会う事はなかった。

「てな訳でね」

「そうですか……」

チエルリーはヴェルマーレの話を酒に付き合いながら聴いていた。既にアールスは部屋に戻りバウリは自棄酒で床に寝転がっていた。ヴェルマーレは渋るチエルリーを無理矢理座らて突き合わせていた。

「曾お爺様はそういった方だったんですね」

「あなたはバルザに似てるわ。無愛想な所とかね」

「それ誉めてます？」

「さあどうだが。似てると言えばこの子も似てる。ヘタレな所とか」

「でも坊ちゃまは頑張りました」

「そういう所もよ」

ヴェルマーレは美味しそうにコップの麦酒を飲み干した。

22話 蒼い髪の少女の依頼

それはとある朝。

アールスは一人で行き着けの食堂へ来ていた。

「混んでるな…」

店内は人でごった返しており店員が忙しく動いている。

本当ならもう少し早く来れたのだが、道中でブーツの紐が切れたり鳥に糞をかけられたり黒猫の集団が前を横切ったりして時間を喰ってしまったのだ。

「今日に限って運の悪い…」

他人から見れば運が悪いと言うより縁起が悪いと感づくのだがアールスはそう言った事は信じていなかった。
何せ身近にいる女神様があれだから。

「相席になりますが宜しいでしょうか？」

諦め帰ろうとした時店員が声を掛ける。

丁度席に空きが出来たようだ。

アールスは頷き席を案内して貰う。

席は隅にあり蒼い髪をツインテールにした少女が食事をしていた。

「相席宜しいでしょうか？」

店員の言葉に無言で頷く少女。

「失礼」

アールスはその少女に一言声を掛け座り……………立ち上がった。

ガシッ。

すぐさま立ち去ろうとしたアールスだったが裾をその少女に握られる。

「何処行くの？」

「……………花に水をやるのを忘れてて」

「そんなのいいから座って」

「いやでもな……………」

「泣き叫ぶ」

「解りました」
溜め息混じりに座る。

その少女にアールスは見覚えがあった。
名をラザリィ。

蒼い髪が特長の少女。

それは以前シュベルツアを訪れた時に出会っていた。

アールスが逃げ出そうとしたのも無理は無くその時に命を狙われたからだ。

撃退したものの決して弱くはなく出来れば二度と相對したくない相手でもあった。

初対面の時は少し天然の入った成り立て冒険者風だったのだがそれはアールスを騙す為の演技で、今食事をしているラザリーは無言で無表情。

どうやらこれがラザリーの素のようだ。

「頼み事」

食事を終えたラザリーが発した言葉がそれだった。

「断る」

即決するアールス。

「何故？」

「その何故が何故だ」

アールスとしては頼まれ事を請ける仲になった覚えはない。

「きゃー！！お尻触らないで下さ……」

「止めるこらあ！！」

いきなり叫んだラザリーの口を抑える。

「あのお客様？」

怪訝な表情で様子を窺ってくる店員。

「いや！？この子冗談が好きで！！な？な？」

口を抑えられたまま頷くラザリー！。

「はあ……」

納得はしていない様だが戻る店員。

「聞く？」

「解ったからせめて場所を変えさせてくれ」
アールスは懇願した。

「ラメドさんヴェルマーレは？」

「まだ寝てるみたいだよ」

逃げるように食堂を出たアールスはラザリーと泊まっている宿に来ていた。

「つたく……起こして来るからこの子に何か飲み物出しといてくれ」

二階へ上がりノックもせずにヴェルマーレが寝ている部屋に入る。

「あらアールスさん」

「チエルリー？」

其処にはヴェルマーレは何時ものようにだらしなく寝ていたのだがメイド姿のチエルリーが部屋を片付けていた。

そのためか何時もは散らかり放題の部屋は綺麗に片付いていた。

「駄目ですよ、女性の部屋にノックも無しに入るなんて」

「それは悪かったがもういいのか？」

チエルリーとバウリは実家に報告するために1ヶ月前から帰省していた。

「はい。ただ坊ちゃんまは旦那様が鍛え直すとの事で残られました」

「あんたは？」

「旦那様からお暇を頂きまして。前回の事でアールスさんやヴェルマーレ様にお世話になりましたので暫くお手伝いを」

「そうか。別にいいんだが」

「いえ、それでは申し訳が立たないので」

受け答えるチエルリーは優雅でしつかりとしている。流石はナテランタ家のメイドである。

「じゃあヴェルマーレを起こしてくれないか。話す事があるから」

「請け賜りました」

頭を下げるチエルリーは早速ヴェルマーレを起こしに掛かる。

任せて大丈夫と判断したアールスは部屋を出て行く。ヴェルマーレを起こすのは中々難儀な事なので助かったと胸を撫で下ろした。

「おっはよー」

「お待たせ…しました」

それから数十分後降りてくる二人。

しかし様子がおかしく、ヴェルマーレは肌を艶々させチェルリーは顔を赤らめ息を乱している。

「お前何やった？」

「んゝちよつと寝ぼけてて…」

ポリポリと頬を搔くヴェルマーレに俯くチェルリー。

「結局俺の役目は変わらんか……もういい取り敢えず座れ」

ラザリーの正面にアールスとヴェルマーレが並んで座り後ろにチェルリーが控える。

アールスがヴェルマーレ呼んだ理由は至極簡単な事で、どの道ラザリーの依頼を請ける羽目になるのは目に見えている。ならヴェルマーレを巻き込み出来る事なら押し付ける考えだ。

「この子は？」

アールスはこの少女がラザリーだと説明する。

「へえゝこの娘がねえ」

舐めるようにラザリーを見る。

しかしラザリーは相変わらず無表情のまま。

「笑ったら可愛いのに」

「意味が無い」

「連れないなあ。で、どしたの？」

アールスはラザリーに目配せする。
ラザリーから話させる。

「依頼を請けてほしい」

「いいよ」

即決するヴェルマーレ。

「だろうな……」

予想はしていたが余りのアッサリ具合に疲れたように呟く。

「んで内容は？」

「ある国である要人の護衛」

「場所とその名前は？」

「聞いたら退けない」

「何を今更。どうあっても請けさせるつもりだったくせに」

ラザリーはコクリと頷き口を開く。

「ラコム王国第一王位継承者トシャフ・ウィルナ・クレベール王子
の護衛」

23話 三王国

ラコム王国首都ユーアラシア。

ザルマドから馬車で一週間揺られヴェルマーレ、アールス、チエリ、ラザリーの四人は此処ユーアラシアへ来た。

流石大国と呼ばれているラコム王国の首都であるユーアラシアはザルマドに負けず劣らず賑わっている。

「で、これからどうするんだ？」

アールスは屋台で買った串焼きを頬張りながらラザリーに聞く。

「依頼主に会いに行く」

手に十本以上の串焼きを持つラザリー。

「まったく、子供じゃないんだから買い食いなら後にしたら？」

「お前もな」

既に四杯目の麦酒を飲み干したヴェルマーレに突っ込むアールスだった。

「ふっ…」

疲れた様子で私室のソファに身を委ねる。

彼はラコム王国の王グリム・ウィルナ・クレベール。

齢50を越えながら未だ屈強な体格は衰えていない。

が、その顔には疲労の色がありありと浮かんでいる。

グリムは瓶を取り出しグラスに注ぐ。

一口飲みホウと息吐く。

それはワインだが決して高価な物ではなく一般庶民でも買える値段。

本来王が飲むワインではないがグリム自身が気に入って密かに取り寄せている。

「父上の苦勞が身に染みて解るな」

偉大だった前王である父に思いを馳せるグリム。

「協力者を連れてきました」

無機質な少女の声が部屋に響く。

「入れ」

グリムはグラスを置き扉ではなく窓に向く。

窓から三人の女と一人の男が室内に入ってくる。

当然だが王であるグリムの部屋の窓から人が出入りする事は無い。

「ご苦勞だったラザリー……………!？」

グリムの表情が驚きで固まる。

そして慌てるようにその女性の前で跪く。

「お久しぶりですヴェルマーレ様」

「お久ねグリム。年取ったわねえ」

「あなた様は変わらずお美しい」

「口の上手さは変わらずね」

気軽なヴェルマーレに敬意を払いつつ楽しそうに話すグリム。

「彼女何者？」

無表情な顔に驚きを隠せないラザリー。

「飲み友達なんだろ」

アールスは肩を竦め答える。

ラザリーは不愉快そうにするもののそれ以上聞いて来なかった。
ヴェルマーレと一緒に旅を始めてからこういった光景はよく見ているので今更驚かないアールス。
チエルリーは流石だと感心している。

「良いの飲んでるわね」

飲みかけのグラスを見つけたヴェルマーレは口元を緩ませる。

「飲みますかな？」

「勿論」

「皆も座って下され。飲みながら話しましょう」

いそいそと人数分のグラスを用意するグリムに慌ててチエルリーが変わろうとするが、「ヴェルマーレ様の連れにさせるわけにはいかない」と言われ仕方なく身を引くチエルリー。

グラスにワインを注ぐグリム。

「味は保証しますぞ」

そうグリムは楽しそうに言いワインを口に含む。

一国の王が直接ワインを注ぐという珍しい光景に固まるラザリーにチエルリー。だがヴェルマーレとアールスは気にせずワインを飲む。

「へえ、旨いな」

「解るかね？」

「ええまあ」

ヴェルマーレに付き合わされて飲む事がある為多少は酒の味は解るアールス。

「ふふ」

ヴェルマーレは鼻歌混じりで飲んでいる。気に入ったようだ。

「王よ、私はこれで」

「うむ。宜しく伝えておいてくれ」

ラザリーは軽く頷くと出されたワインに手を付けず窓から出て行った。

「あの子は？」

「人手が足りないもので、とある知り合いから人をまわして貰ったのです」

「ふん……」

「どうかなさいましたかヴェルマーレ様？」

「うん何でも。それで私達は何をすればいいの？」

ヴェルマーレの様子が気になったグリムだったが説明する事にした。

「それなのですが息子であるトシャフが 婚約する事になりました」

「それはおめでと。で、相手は？」

「トルチ王国のファリアンヌ王女です」

えっ！？とアールスとチェルリーは驚く。

「それは面倒くさいわね」ヴェルマーレも思わず苦笑いする。

ラコム、トルチ、シヨルナの三国はそれぞれ隣接している王国であり昔から争いが耐えなかった。それを前王であるグリムの父が中心となり三国が和平協定を結ぶ事が出来た。

「となるとシヨルナが黙ってないんじゃない……」

アールスの危惧も最もな事。

三国がお互いを監視と警戒をする事により表面的な争いは避けられてきた。言わば三竦み。

それが婚約によりラコムとトルチは同盟状態になる。

シオルナとしてはそれは避けたい。

「今は何も無いがこのままスナリ行くとは思えなくての」

「それで私達がトシャフ様の護衛を？」

「本来ならば我が国の人間に守らせるのだがシオルナが何の動きも見せていない状況で表立った事は避けたいのだ」

「つまりさり気なく護衛が出来る程の実力者が欲しかったと…」

「それが私達って事ね」

グリムはそれらの言葉を肯定するようにヴェルマーレ達を見渡し、

「ラザリーに腕の立つ者を連れて来るように頼んだのです。まさかヴェルマーレ様を連れて来るとは思いませんでしたか」

「あら私達じゃ不満？」

「とんでもない！！ヴェルマーレ様以上の者など居ないでしょうし、一緒にいるあなた達もただ者では無いこと位は解ります」

「まあ確かにコイツ（ヴェルマーレ）に護衛をやらせれば大丈夫だろうけど別の面倒事が起きるかもよ？」

「ぶー、何よそんな事有るわけないでしょ。ねえ？」

同意を得ようと皆を見るヴェルマーレ。

しかしチェルリーとグリムは視線を外す。

「あ、あれ？」

「ほら見る、自覚が無いのがより質が悪いんだお前は」

「そんな事無いわよ！！」

それから暫く二人の言い合いは続いた。

24話 トシャフ

「今日からトシャフ様付きの近衛隊に入りましたアールスと言います、以後お見知りおきを」

アールスの前には一人の青年が居る。

女性と見間違える程の美貌に華奢な身体。

現国王グリム・ウィルナ・クレベールの一人息子にして王位継承権第一位のトシャフ・ウィルナ・クレベールである。

「ふむ。まあ頑張りましたまえ」

トシャフはアールスを一瞥すると興味を無くしたのか鈴を鳴らす。

「お呼びでしょうかとトシャフ様」

現れたのは何時もより上等な造りのメイド服を着たチェルリーだった。

「喉が渴いた、何か飲み物を」

「畏まりました」

「待ちたまえ」

礼をし立ち去ろうとするチェルリーを呼び止める。

「確か君は新しく入ったばかりの娘だな？」

「はい。昨日からで御座います」

「ふん。こちらに来たまえ」

「失礼します」

近づくチェルリーの手を取る。

「美しいな君は」

「勿体無いお言葉で」

無表情で言葉を返すチェルリーだがこめかみに浮き出る青筋をアールスは見逃さなかった。

「所で君は誰の紹介で此処へ来たんだい？」

「はい。王のご紹介でこのお仕事を頂きました」

途端、ピタリと停止したトシャフから冷や汗が吹き出る。

「……………父の？」

「はい。私の友人と王が古い付き合いだそうで、その縁で」

「そ、そ、そうか頑張りたまえ！？」

「お気遣いありがとうございます」

チェルリーの手を離し明らかに動揺した様子のトシャフ。

（成る程な……………）

アールスはこれまでのやり取りを見てトシャフと言う人物を観察していた。

見た目からして王のグリムとは正反対。

グリムは歴戦の戦士のような風貌に今まで側室を持つともせず女性関係での噂は全くない。

対してトシャフは体つきと身のこなしから強くないのが解る、精々

一般兵程度。そして先程のチェルリーに対する態度から見ても恐らく女好き。

（しかも父親が苦手。やれやれ…面倒事が起きなきゃいいんだが）
アールスがそんな事を考えていると白髪の執事が部屋に入ってきて来る。

「トシャフ様、面会を望む者が来ております」

「断れ」

「しかしグリム様がトシャフ様と会わせるようにと」

「ちつ………解った今行く」

明らかに不服そうな顔したトシャフだったが渋々了承した。

謁見の間。

王グリムの姿は無く玉座に座るのはトシャフ。

背後に四人近衛隊が守るように立ち、その中にアールスが居る。

チェルリーはメイドと言う立場から此处には居ない。

トシャフが見下ろすその先には薄い紫色のベールを頭から被る女性が跪いている。

「何の用だ。いやその前に私の前で顔を隠すとはどういった見だ」

トシャフは不機嫌な様子を隠さない。

「申し訳ありません」

女性はベールを外す。

「おお……」

トシャフは思わず身を乗り出す。

その女性はまさに絶世の美女。神々しいまでの美しさ。近衛隊もその美しさに見とれてしまう。

「私は占い師のヴェルマレラと申します。今まで旅をしていましたが身体を壊し、この街に定住しようかと思いい立ちまして昔お世話になりました王を頼り此处へ来ました」

「それで父上は何と？」

落ち着きを取り戻したトシャフは玉座に座り直す。

「息子……トシャフ様のお力になってくれと」

「良いだろう、お前は俺が召しかかえよう」

トシャフは邪な笑みを浮かべる。

「ならば一つ占ってくれ」

「畏まりました。では……」

ヴェルマレラは赤ん坊の頭程の大きさの透明な球体を置く。

「……………」

ヴェルマレラは球体に両手を翳し目を瞑っている。

「……………トシャフ様には女神の加護があり幸せに導いてくれるでしょう」

「おお！！そうか！！」

トシャフは立ち上がり喜ぶ。

この世界の占いは一種の未来予知のような物。

ヴェルマレラが出した球体は『瞳孔光石』と言われる神滅石。

占いはこの瞳孔光石を使う事により、大まかだが未来を予知出来る。

「この者を客間に案内しろ！！丁重にな」

トシャフは上機嫌のまま謁見の間を出て行った。

「では此方へ」

アールスがヴェルマレラを客間へ案内するため近づく。

（雰囲気出てたでしょ？）

（あーはいはいそうですね）

心底楽しそうにするヴェルマレラ……………ではなくヴェルマールにウンザリするアールスだった。

25話 密会

「お集まり頂いて済みませんな」

「一杯どう？」

「馴染みすぎだろお前」

あれから数日経ち深夜。

グリムの私室に三人が報告の為集まっていた。
なのだがヴェルマーレは既に居り一人宴会状態になっていた。

「それでトシャフ周辺で何かありましたか？」

「それなんです……」

言いにくそうにチエルリーが口を開く。

「事ある毎に手を握って来たり腰に手を添えて来たりして……正
直辟易してまして」

「そう言えば私も」

はいはいとヴェルマーレは手を上げる。

「堂々と夜に誘って来たのよ。まあひっぱたいて気絶させたけどね
え」

因みにトシャフはその事をすっかりと忘れてしまった。それ程ヴェ
ルマーレの一撃が強力だったのだらう。

「あの馬鹿息子が！！チエルリー殿とヴェルマーレ様に手を出すとは！！」

怒りで興奮したグリムは剣を取り部屋を出ようとする。

「待った待った、それは俺達が居なくなってからにして下さい。それより気になる事が…」

「気になる事……ですか？」

「ああ。昨日の事なんだがトシャフがある兵士と密談しててな。またメイドでも口説いてるのかと思ったんだが相手は男だったから気になってね」

「へえーグリム、あなたの息子男色の気があるみたいね」

「そ、そんな…」

「ああ！？気を確かにグリム様！！」
顔を青くし倒れるグリムを支えるチエルリー。

「それなら別に良かったんだが」

「良くはないのだが…」

「途切れ途切れにしか会話は聞こえなかったんだが、どうやら明日の深夜に城を抜け出すらしい」

「トシャフが？」

「心当たりは？」

「いや……無い」

困惑するグリム。

「なら明日俺とチエルリーが後を付ける」

「止めさせた方が良いのでは？」

チエルリーの提案に軽く頭を横に振るアールス。

「白をきられたらそこまでだ。トシャフが危険な目にあっても俺とチエルリーなら何とかなる」

Sランクのアールスにそれに匹敵する実力のチエルリー。
確かにこの二人なら並大抵の敵は問題ない。

「まあ多分そんな事にはならんと思うがな」

「根拠あるの？」

「勘だよ。嫌な勘程当たるんだ」

アールスにとってはトシャフが襲われる事は大した事ではない。仮に襲ってきた敵の黒幕がシヨルナだとしてもそれを証拠にしヴェルマーレを行かせてやればいい。

ヴェルマーレであれば強引でもどうにかしてしまうからだ。

だがアールスはその事にならないと半ば確信している。

理由はないし根拠もないがそんな気がしてならないのだ。

「はあ……鬱だ」

一台の馬車が城を出ようとしている。

「他の者にバレてはおらぬな？」

「はっ…それは勿論」

「うむ、では出せ」

動き出した馬車は王族が使用する豪華な物ではなく幌付きの地味な馬車。

内部にはトシャフと男の兵士が二人………だけではなく不自然に置かれている樽。

それに後二人居た。

（変な所触らないで下さいよ）

（しないよ。俺も命は惜しいからな）

大きな樽とは言え大人二人が入るとかなり窮屈になる。

下手をすればチェルリーの言うとおり拙い所を触れてしまい兼ねないでいた。

（でも何で私も行くんですか？）

（もしもの時の為に二人は必要だ）

（だからって…）

（じゃあ何か？ヴェルマーレに來させた方が良かったと言いたいの
か？アイツにこの状態が我慢出来るとでも言うのか？）

（苛ついてますアールスさん？）

（……………濟まん）

暫くした後馬車は止まる。

馬車内の人気が無くなりアールスとチエルリーは辺りを伺いながら
樽から出る。

お互い気配を消し外へ出る。

暗闇の中、月明かりが照らす。

其処は古ぼけた屋敷だった。

蔓が屋敷を覆い庭は手入れされておらず雑草は延び放題。

「トシャフ様！！」

不意にした声の方を身を隠しながら見やるアールスとチエルリー。
トシャフに駆け寄り抱きつく女性。

「ああ…愛しのアスレディア元気だったかい？」

「いえ……………あなた様とお会い出来なく寂しくてしょうがありません」

「濟まないねアスレディア、ずっととはいかないが限られた時間を
楽しもう…」

「はい……………」

重なる二人の影。

「逢い引きのようですね……………相手は誰でしょう？」

「アスレディア……………本人どうか解らんが聞いた事がある名だ」
「アールスはゴクリと唾を呑み込む。」

「シヨルナ王国第一王女アスレディア……………」
その言葉にチェルリーは卒倒しかけた。

26話 二股王子

トシャフの密会を目撃した翌日。
三度グリムの私室に皆、集まっていた。

「こんな所？」

「もうちょつと目は大きかったな」

アールスの指示で似顔絵を描くヴェルマーレ。

実は芸術関係が得意なヴェルマーレ。

描き終わるとその絵は昨夜トシャフに抱きついていたアスレディア
そのものだった。

「どうグリム？」

「…………アスレディア王女で間違いないです」
確認したグリムは力無く答える。

「つまり…あなたの息子のトシャフはトルチ王国のファリアンヌ王
女と婚約しているのにも係わらず、シオルナ王国のアスレディア王
女と恋人関係である。ま、ハッキリ言えば二股？」

「一国の王女相手に二股とはやるなあ」

「まあ屑ですけどね」

三人の言いようにガツクリとうなだれるグリム。

「しかし最初はトシャフの護衛だったのがこんな事になるとはな」

「もう刺されてもいいんじゃないですか？」何故か楽しそうなヴェルマーレに呆れ半分感心半分のアールス。チエルリーに至っては嫌悪感丸出しだ。

「儂が悪いんです」

グリムは手で顔を覆う。

「妻が死んだ後、儂は政務でその悲しみを誤魔化してきました。幼いトシャフを世話係の者に任せたままで」

「そうね……女癖が悪いのは幼い頃充分な愛に恵まれてないからとも言っしね」

「そんな自分の事しか考えなかった儂の責任です……しかしどうすれば良いのか。婚約を解消など出来る訳が無い、しかしアスレディア王女と別れさせれば今度はシヨルナも黙ってはいない……」

「グリム」

ヴェルマーレが優しくグリムを抱きしめる。

「ヴェルマーレ様……」

「あんまり自分を責めないの……。ザッハが亡くなってから良く頑張ったわね。風の噂でも聞いてたし真面目なあなただから予想もつくわ」

「うつ……く……」

「だから私にトシャフの事は任せてみない？」

「しかしヴェルマーレ様にご迷惑は!？」

「何水臭い事言ってるの、偶には甘えなさいグリム」

「ヴェルマーレ様……………」

「素敵ですヴェルマーレ様…」

肩を震わせ泣くグリムに貰い泣きするチエルリー。
ただアールスだけは冷めて見えていた。

ヴェルマーレの口元の端が微かに震えている。

(あれは…)

数年一緒にいるアールスはヴェルマーレの癖を幾つか知っている。

口元の端を震わせるのは嘘の証。

そして優しく微笑んではいるがアールスから見ればそれは新しい玩具を与えられた子供の顔に見えてしょうがなかった。

(ま、トシャフには自業自得って事で諦めて貰うか)

アールスはトシャフを哀れんだ。

「やっと応じてくれたね」

ヴェルマーレはトシャフの部屋に来ていた。

グリムの私室は地味で余計な装飾品の類は置いてない。

しかしトシャフの部屋には絵画や鮮やかな置物、豪華絢爛な装飾のベッドがあり如何にも王族の部屋な趣。

「さあ此方に来たまえ」

トシャフはヴェルマーレの腰に手を当てベッドへと誘う。

「その前にトシャフ様お聞きしたい事が」

「ん？何かね？」

「トシャフ様はファリアンヌ王女とご婚約されていますよね？」

「ああそうだが？」

「噂なのですがシオルナ王国のアスレディア王女とも恋仲だという話があるのですが……」

「本当さ」

「それは不味くないですか？」

「何故だい？どちらも美しく素晴らしい女性だ。一人に絞るなんて出来る訳ないじゃないか」

悪びれた様子もないトシャフ。

「それでこの国ラムドがどうなっても？」

「それは父上がどうにかするさ。さあもうそんな話はいいじゅないか」

ヴェルマーレをベッドに押し倒す。

「此処には私とヴェルマレラ…君しか居ない。愛を語ろうではないか…」

口付けをしようと顔を近づける。

「そうですね……………ではおやすみやさい」

「ふふ…寝るわけないだ……………」
パタンと倒れ寝息を立てるトシャフ。

「中々の女つたらしねこの子」
ヴェルマーレの手のひらには粉があった。

これは『ウルカナ草の粉』。

睡眠促進の薬に使われ麻酔にも使われる薬草。
ヴェルマーレはこれをトシャフに気づかれないよう吸い込ませたのだ。

「入って来て良いわよ」
扉が開くとアールスとチェルリーが入ってくる。

「じゃ運んでくれる？」

「はいはい」
アールスがトシャフを肩に担ぐ。

「足の腱を斬つときでしょうか？」

「そこまでしなくて良いわよ」
真顔で聞いてくるチェルリーに苦笑いで答えるヴェルマーレ。

どうやらチエルリーは相当トシャフが嫌いなようである。

「んで何処行くんだ？」

「リシャル村」

「え？確か其処は……」

「この子を鍛えるには丁度良いからね」

この日を境にトシャフは暫く城から姿を消した。

27話 村人Aに転職

「おら起きろ」

「う……………はっ！？」地面に落とされた衝撃で目を覚ますトシャフ。

「一体何が……………」

「お目覚め？」

「ヴェルマレラ…お前の仕業か！？」

詰め寄ろうとするトシャフをヒラリと交わすヴェルマール。

「これを見れば解るわよ」

一枚の紙をトシャフへ見せる。

「これがどうし……………！？」

内容を読んだトシャフは驚愕した。

文章は長々とあるが要約すれば『トシャフ・ウィル・クレベールの王族の権限を全て剥奪。身柄はヴェルマールの一存に任せる』という内容だ。

「馬鹿な！！何だこれは！？」

「何ってあなたのお父さんからの正式な書状よ。この王印が証拠」
書状の最後には印が押されている。

王しか押せない印で、これがある書状には絶対の権限が発生するのだ。

「因みにヴェルマーレってのは私ね」

「お前私を騙したのか!!」

「うゝん……まあそう言うことね」

「許さん!!」

「ほいっと」

再度掴み掛かろうとするトシャフだがまた交わされ地面に突っ伏す。

「態度には気をつけた方がいいわよ？何せあなたの今後は私の気分
でどうとでもなっちゃうから」

「ぐっ……」

「いい加減話を進めたらどうだ」

「往生際が悪いですね」

「貴様らもこの女の仲間か!!」
ようやくアールスとチェルリーの存在に気づいたトシャフは怒りを
ぶつける。

「村の外で何をしている!!」

村から一人の男が現れる。

熊を思わせる巨体を揺らしながら4人に近づく。

「相変わらずむさ苦しいわねゲイジ」

「ん？おお！！ヴェルマーレ様ではないか！！」

ヴェルマーレからゲイジと呼ばれた男は子供のような無邪気な笑顔で駆け寄って来る。

「まさかこんなに早くまた会えるなんて思わなかったぞ！！」

「ちょっと頼み事があつてね」

「何でも言ってくれ！！ヴェルマーレ様のお願いなら皆喜んで請けるぞ」

「ありがと。あの子を鍛えてやってほしいの」と、トシャフを指差す。

「随分軟弱そうな餓鬼だな？」

「ええ。この子を立派な村人Aにしてあげて」

「任せてくれ。小僧コツチへ来い！！」

「や、止めるお！？私を誰だと思っている！！」

「つべこべ言わんとサツサと来い！！」

襟首を掴まれ引きずられるように村の中に消えて行った。

「そんじゃ私ちょっと出かけてくるわ。二人共宜しくね」

「ああ」

「お気を付けてヴェルマーレ様」

「何で私がこんな事を……………」

簡素な服に着替えさせられたトシャフは鍬を手に畑にいた。

「何を呆けている!!」

畑の外ではゲイジが腕組みをしている。

「この畑は今日からお前が面倒を見るんだ!! さつさと耕せ!!」

「こ、此处を?…」

トシャフは畑を見渡し唖然とする。

畑は約十メートル四方。畑としては特別広くはないが一人、しかも素人が耕すとなるとかなりの労力と言える。

「今日中にやらんと飯はないぞ!!」

「やればいいんだろうやれば!!」

半ばやけくそ気味に鍬を振るい始めるトシャフ。

「はあはあはあ…」

しかし少しただけで息が上がりバテてしまふ。

「そんなんじゃ終わらんぞ」

鍬を持ったアールスが畑に入ってくる。

「貴様よくもぬけぬけと…」

「じゃ手伝うの止めるか？」

「……………」

敵意剥き出しのトシャフだったが流石に一人では無理だと判断したのか反論しなかった。

「ふん、そこまで言うなら手伝わせてやる」

「はいはい」

それから二人は黙々と畑を耕す。

「力が入りすぎだ。鍬を地面に突き刺す時にだけ力を入れればいい」

「五月蠅い」

口ではそう言うトシャフだが最初よりも上手く出来るようになっていった。

「…あの女は一体何者だ」
ポツリとトシャフは呟く。

「あの……あゝ、ヴェルマーレの事か？」

「あの女の持っていた書状の王印は間違いなく本物だった。本来王印の入った書状は王族しか扱えない。それを持っていたあの女は誰何だ!？」

「一番有名なヴェルマーレだよ」

「一番?.....まさか!？」

「自分の親から聞いた事ないのか？」

「確かに子供の頃父上から聞いた事がある。しかし女神ヴェルマーレはお伽話ではないのか!？」

女神ヴェルマーレが実際にこの世界に居ることはある程度の地位に居る立場なら知っている事柄だ。
トシャフが知らないのは彼自身がまだ政務に全く関わっていないから。

「さあな。それより急がないと夕食に間に合わないぞ」
トシャフの言葉には答えず再び鍬を振るうアールス。

「何だと言っただ一体.....」

「何とか終わったな」

「……………」

夕暮れ。

畑に佇む二人の影。

気持ちよさそうに汗を拭うアールスに、力尽き座り込むトシャフ。

「コツは解つたろ？明日から一人だが頑張んな」

「……………」

返事をする気力もないトシャフだった。

28話 無口な少女

トシャフがリシャル村に来て1ヶ月が経っていた。

「もういいのか？」

「……………はい」

出された夕食を半分以上残し部屋へ戻るトシャフ。

アールスが畑仕事を初日以外にも手伝ってはくれていたが、2週間前に村を出ていつてからは完全にトシャフ一人でやっていた。

そのためか身体中筋肉痛で歩くのも苦勞する始末。

部屋に戻ったトシャフはベッドにうつぶせで倒れる。

トシャフが世話になっているゲイジはこのリシャル村の村長。家は他と比べると立派でトシャフに与えられた部屋も小綺麗な物だ。

勿論城にあるトシャフの部屋とは比べるまでもないが。

「このままでは本当に死ぬ……………」

今までまともな運動もしてこなかったトシャフに畑仕事は過酷な作業だった。

「逃げるか……………何処に？」

トシャフは自嘲する。

今のトシャフは王族でも何でもないただの平民。いや寧ろ元王族という肩書きが厄介なのだ。

ただの平民なら移住は普通に出来る。

しかし王族を剥奪されたとなると話は別となる。

理由があつたにせよ碌な^{ろく}ものではないと容易く予測出来る。

そんな者を受け入れる物好きは居ないし、居たとしても元王族を利用しようとする者達。

そんな連中に目を付けられてしまえば待つているのは身の破滅。
結局トシャフに選択の余地はなかった。

トントン。

扉がノックされる。

「どうぞ……」

トシャフは見る気にもならず顔を枕に埋めたまま返事をした。

扉が開き誰かが近づいて来るのが解る。

しかし足音が軽いのに違和感を感じる。

ゲイジやその妻ならもう少し足音は大きい。

トシャフは顔を上げ近づく人物を確かめる。

（子供？）

そこに居たのは十歳位の女の子。

栗色の髪に目は隠れ表情はよく解らず、地味な草色のワンピースを着ている。

「確か君は……」

トシャフは記憶を探りそして思い出す。

この少女はゲイジの一人娘で名前はアイカ。

ただトシャフと話した事はなく初対面の時もゲイジの後ろに隠れたままだった。

「どうしたんだい？」

トシャフは極力優しく話しかける。

アイカをぞんざいに扱い家を追い出されては堪らないからだ。

「……………これ」

アイカが差し出したのは数粒の乾燥果実だった。

「疲れてるみたいだったから……………」

アイカはトシャフの手にそれを渡す。

「はは……………子供から憐れみを受けるとは」

力無く笑い、貰った乾燥果実を一粒口に入れる。

「……………甘い」

それは予想以上に甘く美味しかった。

「うつ……………く……………」

様々な感情がトシャフの中を駆け巡り不意に涙が出てくる。

「泣かないで…」

そんなトシャフの頭を撫でるアイカ。

「私も悲しい時、お父さんとお母さんにこづされると涙が止まるの」

「そうか……………」

少女に頭を撫でられたりすれば普段のトシャフなら怒りその手を払いのける。

しかし今はただ心地良かった。

心が温かくなり涙が止まるのをトシャフは感じる。

「ありがとう」

それはトシャフが初めて心から言ったお礼だった。

トシャフがリシャル村に来てから半年が経とうとしていた。
この頃になるとトシャフは畑仕事にも慣れ難くこなしていた。

「ようこそ苦労さんトシャフ」

「ゲイジさん」

ゲイジが雑草を抜いているトシャフの肩に手を置く。

「ふむ順調だな」

ゲイジは畑から生えているリシャル麦を手取る。

リシャル麦で作った麦酒はこの村の名産品で他の地域でも人気が高い。

「後2カ月位で収穫だな。よく頑張ったなトシャフ」

「いえ、皆さんの力添いのお蔭です」

今のトシャフからは依然のような傲慢さはなくなっていた。最初は筋肉痛と疲労でフラフラだったが次第に慣れ、少しずつ成長するリシャル麦にも愛着が湧き今では楽しくてしょうがなかった。

「そろそろ昼飯どうだい？」

「済みません、約束が……」

言いよどむトシャフにニヤリと笑い肩を組むゲイジ。

「人見知りのあいつがここまでお前に懐くとはなあ……」

「そ、そうですね」

「解ってると思うが……」

ゲイジが声を潜める。

「手出したら殺すぞ」

「出しません！……と言つか相手は子供ですよ！？」

「まあそつなんだが親としては心配だな」

「それに俺は………」

「ん？」

「いえ何でもないです。もう行きますね待ってる筈ですから」

「おお、行ってやってくれ」

村外れに一本の巨木がある。

村人から『命の木』と呼ばれているその木が彼女との待ち合わせ場所。

近づくとも見慣れたワンピース姿が見えてくる。

彼女もトシャフが見えたのか手を振っている。

トシャフも手を振り返す。

「待ったかい？」

そう言っているとアイカは首を横に振り抱きついてくる。

「おっとつと。さあご飯にしようか」

アイカは嬉しそうに頷いた。

トシャフとアイカがここで会うようになったのは3ヶ月程前。
アイカがトシャフと一緒に昼食を取りたがったのだが他の人達見られるのを恥ずかしがったのだ。

「美味しい？」

「ああ美味しいよ」

「」

満面の笑顔になるアイカ。

トシャフが変われた一番の要因はアイカだった。

この無口な少女はトシャフが落ち込めば慰め真剣に心配もした。

そうだったアイカの優しく純粋な心でトシャフは変わった。

それと同時にそれまでの自分を悔いた。自分を好いてくれた女性を裏切った自分。

だからトシャフは自分には女性を愛する資格はないとした。
ゲイジはああ言ったがアイカはトシャフにとって家族であり妹のよ
うな存在で異性として愛する事は無いとトシャフは思っている。

「ふう…」

昼食を終え木に背中を預けて一服する。
隣にはアイカが寄り添う。

トシャフには気懸かりがあった。

婚約者のファリアンヌと密かに会っていたアスレディア。

あの時のトシャフはこの二人を愛する事に何の躊躇も無かった。

しかしそれはファリアンヌとアスレディアの二人を裏切る事。

またそれだけではなく、この事が公に出て下手すれば戦争になるか
もしれない。そうなれば沢山の人が死にこの平和な村が戦場になり
かねない。

ただ現在そんな話は無い。

トシャフが王族の権利を剥奪された以上婚約も解消されている筈な
のに噂の一つも無い。

余程王であり父のグリムが上手くやっているのだろう。

（愚息である私を許して下さい父上…）

もう会う事はないだろう自分の父に謝るトシャフ。

「何だい？」

そんなトシャフの頭を撫でるアイカ。

「トシャフ悲しそうにしてた」

「そうか……………ありがとう」

そして2カ月後。
リシャル麦の収穫の季節を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8153q/>

女神ヴェルマーレ

2011年12月3日15時52分発行